森のはこ舟
アートプロジェクト2016

福島藝術計画 ×Art Support Tohoku-Tokyo

ACTIVITY REPORT 2016

活動報告書

雪だ 光だ

水だ 野火だ

風だ 木だ

鳥のさえずり

ようこそ

母なる

箱舟の港へ

何億もの櫂が

そそり立つ

空と大地へ

会津の森へ

和合亮一

02 目　次

03 開催概要

05 組織体制・開催エリア図

07 活動報告

喜多方エリア
「高郷プロジェクト」
「楚々木樂舎」

西会津エリア
「にしあいづ・縄文と森のがっこう」
「森を漉く」
「草木をまとって山のかみさま」

三島エリア
「森 光 水 -Natural Energy Valley MISHIMA- 」
「縄文採集型・古民家リノベーション」

猪苗代エリア
「森の氷本」

北塩原エリア
「磐梯山の森はできたてほやほや」
「絵画やスケッチを通してみる磐梯山」

南相馬エリア
「太古の森を感じて」

クロージングフォーラム
「森の鼓動、人の蠢き、アートの力」

49 随想 「ばらばらな人たちが、ともに文化の土壌を耕した、3年」佐藤李青

51 再録インタビュー
「事務局の役割とは、森を見渡すこと」遠藤和輝
「町から森へ向かう独特のスピード感」五十嵐恵太
「変化のきっかけをつくるということ」矢部佳宏
「アートの通じない町で、アーティストを受け入れる」三澤真也

59 インタビュー
「町の素材を活かすアート」岡部兼芳
「一大観光地としての森をどう活かすか」赤木進二

63 再録鼎談
「森のはこ舟の理念とこれからの展望」
伊藤達矢×遠藤和輝×川延安直

69 再録対談
「なぜ、博物館でアートなのか?」赤坂憲雄×小林めぐみ

71 あとがき

※P50〜58、P65〜70は「森のはこ舟アートプロジェクト2015報告書」に掲載されたものを再録しています。

編集：伊藤達矢、渡部あきこ
インタビュー協力：小松理虔
デザイン：佐久間香織、五十嵐恵太
写真提供：須田健志、佐藤聖太、大政愛、各エリアスタッフ
発行：森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会
発行日：2017年3月23日

［お問い合わせ］
福島県耶麻郡西会津町野沢字原町乙2207-1
090-5357-3381（特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク）
Email：info@morinohakobune.jp

開催趣旨

四季折々に豊かな表情を見せる森は、多くのめぐみを与えてくれる命の泉です。森は、山、里、海、そして人の心の豊かさを生み育ててきました。
人々は、森から糧を得、器を家を造ってきました。森は、恐れ崇める場であり、安らぎの場でもありました。
浜辺の松林、里山の広葉樹林、奥羽山脈のブナ林。はま、なか、あいづの森が県土の7割を占める福島は、森のくにです。
東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故により、福島県は大きく傷つけられました。大量の放射性物質が拡散し、多くの人々はふるさとを離れ、今も将来への不安を抱えながら暮らしています。
私たちは、福島再生のために、美しい自然と人々が愛しみ育ててきた豊かな森林文化をテーマとした新たなアートプロジェクトを展開し、未来へ希望を発信するとともに未来に向かう福島のイメージの創造を目指します。

コンセプト

森につどい、学ぶ

ふくしまには、豊かな森があります。
生命の重み、自然の恵み、生きるための知恵。
かつて私たちの先人たちは、森から多くを学んできました。

しかし、今、私たちは森を離れて遠く仰ぐようになりました。

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故は、
私たちが、これまでに失ってしまったことが
いかに大きかったかを明らかにしました。
大きな犠牲と代償に代えて気づいたそのことへの答えを、
大切に育てなければなりません。

だから今、私たちは森につどいましょう。
そして先人の知恵と知識を受け継ぐ森人たちに導かれ、
もう一度森から学びたいのです。

森で考え、未来を創る

森に秘められた教えを読み解くのは、
このプロジェクトに参加する
アーティストたちとあなたです。

森の草木、森の祈り、森の暮らし、
森のエネルギー、森の食。
森の懐に抱かれたそれらの宝物にそっと触れたい。

アーティストたちと森に学んだ後、
森の宝物をあなた自身に活かして欲しいのです。

森人と
アーティストと
あなたと。
森に学んだことから、私たちの今を変えましょう。
そして、未来を創りましょう。

森は、私たちを未来に運ぶ「はこ舟」なのです。

委員長メッセージ

一年のうち何度か会津盆地はすっぽりと霧に包まれる。
盆地に被せた大きな蓋のような霧を抜け、
盆地を取り巻く山の中腹に出る。
そこでは天空の視界を得て霧の蓋は雲海となる。
海原にはいくつもの山の頂、尾根が浮かんでいる。
漕ぎ出す舟のように。
独りでありながら結ばれているように。
その一つ一つに古代からの記憶を刻んだ生き物、草木、暮らし、祈りがある。
白く輝く会津の海に浮かぶ方舟の船団。
これは幻ではない。
この地を、この地に住まう人々を未来へ誘う方舟。
私たちは小さな浮標（ブイ）となろう。
舟を導くために。

森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会委員長
福島県立博物館長　赤坂 憲雄

ディレクターコメント

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所の事故は、福島に大きな爪痕を残した。
放射能の影響は、県土の約7割を占める広大な森にも及び、震災から月日がたとうとも、未だ復興への道のりは遠い。

福島にとって森は宝である。
人々は古来から、森と共に生き、森から多くを学び、豊かな文化を築きあげてきた。
私たちはこの文化を、これからも守り育てなくてはならない。そして、この受け継がれて来た文化でしか成し得ない復興がある。
今の福島に必要なことは、見慣れた山、見慣れた川、見慣れた空の風景を、もう一度自分以外の誰かと、眼差しを共有し、見つめ直すことでは無いだろうか。

森の文化は、人々を包摂する力をもっている。
先人から受け継がれて来た知恵や技や物語を、多くの人々と共有することで、異なった幾つもの価値観が交わり、またそこから新しい価値が生み出されてゆく。
それこそが、人々の生命力へとつながる森の文化である。

森のはこ舟アートプロジェクトは、アーティストと共に、森を見つめる時間と場所を創造する。
福島の未来は、人々が森を見つめる眼差しの先にあると感じている。

森のはこ舟アートプロジェクト ディレクター
東京藝術大学 美術学部 特任准教授　伊藤 達矢

実行委員会

●委員長		県立博物館館長		赤坂　憲雄
●副委員長		県文化振興課課長		鶴見　宏幸
●ディレクター		東京藝術大学特任准教授		伊藤　達矢
●コーディネーター		県立博物館専門学芸員		川延　安直
		県立博物館主任学芸員		小林　めぐみ
		県立博物館学芸員		塚本　麻衣子
●アドバイザー		アーツカウンシル東京ASTT※1	ディレクター	森　司
●喜多方WG	コーディネーター	空のある生活	代　表	五十嵐　恵太
		特定非営利活動法人まちづくり喜多方	代表理事	蛭川　靖弘
		一般社団法人IORI倶楽部		金親　丈史
		特定非営利活動法人まちづくり喜多方		佐川　友美
●西会津WG	コーディネーター	西会津国際芸術村	㈱西会津町振興公社職員	矢部　佳宏
		㈱西会津町振興公社		蒲生　庄平
		西会津国際芸術村		楢崎　萌々恵
●三島WG	コーディネーター	特定非営利活動法人わくわく奥会津.COM	地域コーディネーター	三澤　真也
		特定非営利活動法人わくわく奥会津.COM	理事長	五十嵐　政人
	事務局	特定非営利活動法人わくわく奥会津.COM		五十嵐　健二
●猪苗代エリア		はじまりの美術館	館　長	岡部　兼芳
		はじまりの美術館		小林　竜也
		はじまりの美術館		大政　愛
●北塩原エリア		北塩原村地域おこし協力隊		赤木　進二
●その他構成メンバー		アーツカウンシル東京ASTT	プログラムオフィサー	佐藤　李青
		アーツカウンシル東京ASTT	プログラムオフィサー	嘉原　妙
		県文化振興課	主　幹	大波　真吾
		特定非営利活動法人Wunder ground	理事長	酒井　悠太
		特定非営利活動法人Wunder ground	副理事長	阿部　峻久
	事務局長	特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク	事務局	遠藤　和輝
	事務局広報担当	特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク	事務局	渡部　あきこ
	事務局会計担当	特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク	事務局	笠間　拓朗
	事務局		事務局	吉田　裕貴
	事務局	県文化振興課		永島　一彦
	事務局	県文化振興課		河原　翼
	事務局	県文化振興課		栗原　聡美

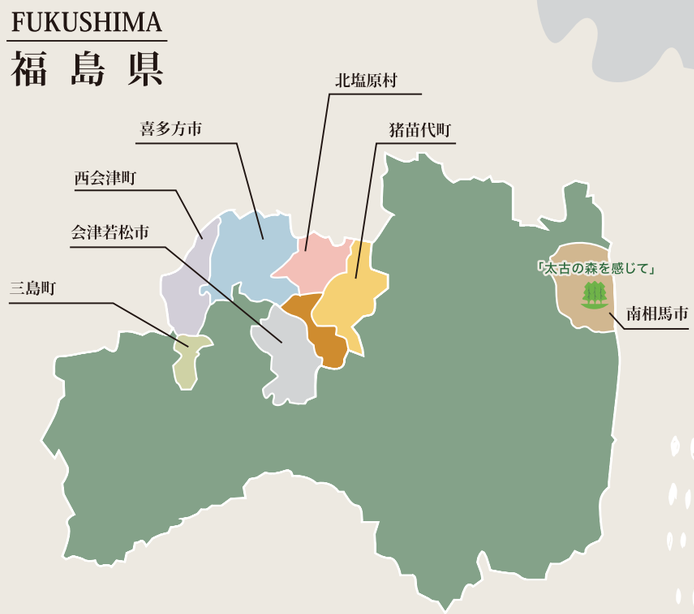
※1 ASTT:Art Support Tohoku-Tokyo の略称です。

ワーキンググループ

- **喜多方市ワーキンググループ**
  - 喜多方市
  - 喜多方市美術館
  - NPO法人まちづくり喜多方
- **西会津町ワーキンググループ**
  - 西会津町
  - 西会津国際芸術村
  - NPO法人 西会津ローカルフレンズ
  - ㈱西会津町振興公社
- **三島町ワーキンググループ**
  - 三島町
  - 三島町教育委員会
  - NPO法人 わくわく奥会津・COM

実施エリア

- **猪苗代**
  - はじまりの美術館
- **北塩原**
  - 磐梯山噴火記念館
  - 諸橋近代美術館
  - 北塩原村地域おこし協力隊
  - ※実行委員会が地元の団体と協力して実行。
- **南相馬**
  - 南相馬市博物館
  - ※実行委員会が地元の団体と協力して実行。



喜多方エリア

2016 Schedule

4/15-17	「高郷プロジェクト」打ち合わせ
4/22-25	「楚々木樂舎」打ち合わせ 愛宕神社祭礼参加
5/13-15	「高郷プロジェクト」打ち合わせ・リサーチ
6/17-21	「楚々木樂舎」打ち合わせ・リサーチ
7/1-3	「高郷プロジェクト」稲垣ゼミ生喜多方合宿
7/30-31	「高郷プロジェクト」ボート練習・リサーチ
8/7	「高郷プロジェクト」シティレガッタ参加
8/23-9/23	「楚々木樂舎」舞台劇準備
9/2-3	「高郷プロジェクト」小林昭二さんインタビュー
9/23-24	「高郷プロジェクト」棚田ウォーク連携企画準備
9/24	「楚々木樂舎」棚田劇『森の婚礼』
9/25	「高郷プロジェクト」棚田ウォーク連携企画
9/25-27	「楚々木樂舎」舞台劇片付け
11/19-20	パートナーシッププログラム「森の収穫　森の食堂」
11/21-30	喜多方エリア活動報告展示

福島県会津地域の北部に位置する喜多方市。かつては“北方”とも呼ばれていました。美しい蔵の街なみ、飯豊山の伏流水がわき出る水路、市街地を取り囲むなだらかな山々。商人の街と豊かな山間地のふたつの顔を持つエリアです。

高郷プロジェクト

プログラム概要

喜多方の街場とは対称的な森と川のエリア・高郷を舞台にして森の地域の“人”に焦点をあて、リサーチを通して得た成果を地域の財産として形にしていくプログラム。2016年度は『地域の取り組みと連携した企画』を実施した。クジラやカイギュウ化石の発見には、多くの女子高校生が関わってきたことを鑑み、現在の女子高校生にも関わってもらおうという発想から生まれた企画『カイギュウランド高郷× 女子高校生』。小土山集落で季節ごとに開催される『たかさと棚田ウォーク』との連携で、夏の棚田風景画の野外展示『棚田ウォーク× 絵画作品展』を実施した。

地域への影響など

継続的な高郷での活動で、森深い地での人や文化、地域行事との関係性が目に見えてくるなか、アーティストの目線でそこにひとつのアクセントが加えられたのが本年度の特徴と言える。また、喜多方市街地でつながった若者を高郷に導き、森の地の魅力を発信する基点となってもらうことに成功。喜多方高校生の有志が作成しているフリーペーパー『クラップ』最新号で、高郷プロジェクトを取り上げ、アートプロジェクトを高校生の目線で紹介することになっている。活動は全国メディアで取り上げられ(『ブレーン』DESIGN/COPY/WEBクリエイティブ専門誌)、ウォーキングに来た人が集落の風景により感動したり、外部の人間によって絵画作品になったり、アカデミックな研究論文(『HOSEI PHRONESIS(法政フロネシス)』)のなかで取り上げられたり、アーテイストならではの試みのなかで地域に貢献し、集落の活性化につながっている。

Artist

稲垣立男

1962年生まれ。アーティスト。地域や個人とのコラボレーションによるアートプロジェクトを国内外で実施している。『越後妻有アートトリエンナーレ(新潟)』などの国際展に参加。近年の活動に、2013年『London Schooling』(London)、『喜多方・夢・アート・プロジェクト「喜多方博物館 五十嵐久悦と絵画」』(福島)など。アーティストインレジデンスやワークショップ、講演の機会も多い。現在、法政大学国際文化学部教授。

Data

【動員延数】約300人
【関係者延数】約50人
【会場】高郷全域
　　カイギュウランドたかさと ほか
【掲載メディア】
『ブレーン』
『HOSEI PHRONESIS(法政フロネシス)』

楚々木樂舎

プログラム概要

喜多方の市街地からほんの少し離れた山間に悠久の棚田風景が今も残る楚々木集落。2014年から森の文化を今に伝えるための調査を実施してきた。3年間にわたって調べてきた楚々木集落と会津地方の婚礼文化。これまでの活動でつながってきた方々とともに、棚田劇『森の婚礼』を小楚々木集落の棚田で公演した。ただ一度きりの舞台は、この地の記憶を呼び覚まし、森に集った人々の心に深く刻み込まれた。

地域への影響など

棚田を使った舞台構想は、楚々木での活動が始動した当初からの構想のひとつであったが、3年目となる本年での実施は困難を覚悟した上での強行であった。これまでの地道な活動の成果として、さまざまな助けがあってこその実現、成功であったと言える。喜多方第一中学校美術部の生徒と共に、放課後の部活の時間を使って作られたお面は舞台を彩る華となった。喜多方高校の有志生徒もあわせて、当日には演者としても加わっていただいた。“舞”、“音”、“食”それぞれに岩間氏のプロデュースにより各分野のプロフェッショナルが参画し、老若男女総勢160名が目撃した“一日限りの舞台公演”は、見た者全てに楚々木という森の地の記憶と、かつてそこにあった森の婚礼文化の記憶を深く刻む機会となった。この記憶が消えることなく、語り継がれることを期待する。

Artist

岩間 賢

1974年生まれ。土や木、水など自然素材を使用し、場と人との対話を生み出す作品を多数発表。東京藝術大学美術学部後期博士課程修了後、文化庁芸術家在外研修員として中国にて創作研究を行う。近年では中国ビエンナーレ参加や、中房総国際芸術祭で「月出工舎」ディレクターを務めるなど、地方の地域づくりにも関わっている。

Data

【動員延数】約300人
【関係者延数】約30人
【会場】楚々木集落
【掲載メディア】
福島民報、福島民友

森のはこ舟から降りたいま、言葉になること

元喜多方ワーキンググループ
佐川友美

森のはこ舟に関わってみて、まずは大変だったなと思う。

苦労したという意味もあるし、私自身が大きく変化したという意味もある。

アートに特に関心もない、よそから引っ越してきたばかりで会津への地縁もない。そんな私のところに、森のはこ舟は降りてきた。いま思えば、子育て経験ゼロの母親が、生まれたばかりの赤ん坊を必死で見るような関わり方を、よくも2年半してきたなと思う。先日のクロージングフォーラムにも参加したが、森のはこ舟のお葬式のようだと思い、感傷的になった。温かな日だった。

私が関わったことが、森のはこ舟にとって、よかったのか悪かったのかわからない。しかし、私にとってはよかった。意味があった。それは、森のはこ舟を通じて、この会津の土地で暮らす方々との、真剣で迫るようなやりとりの機会を持てたことだ。

ある時は、土地の方に「こんなんやって何になるんだ」と言われ、「私にも、それはまだわからないので、やりながら探しているところです」と心臓ドキドキの中、顔を真っ赤にして返したこと。

また、昨年秋、結婚を機に会津から引っ越す準備をしていた時には、楚々木集落の渡部浩さんが「俺はオメのこと、絶対忘れねぞお」と、目頭を熱くさせながら、私の手を握り、はなむけのように言ったこと。

あるいは、高郷町でお世話になった、小土山集落の橋谷田弘由さんが「なんだ、せっかく会えたのになあ…これからって時になあ…」とポツリと残念そうに漏らしたこと。

そういったやり取りを交わしたことが、その時の景色とともに、忘れられない。その内容がポジティブなものでも、ネガティブなものでも、その時のお互いの真剣さは、私の中に焼き付いて、私を支えている。

森のはこ舟の“森”とは、私にとってなんなのか、ずっと考えていた。仕事を始めて1年経っても、それがわからないまま、会議の中でもどかしくて泣いたこともあった。今なら、言葉になる感じがある。

会津の“森”は、私にとって、古い友だちとも呼べるような人々が生きて、暮らしている場所だ。彼らを想うことで、会津は、私が3年半暮らした場所という意味を超え、私の身体の一部のようになった。

私はいま、自分のいる場所で、彼らとのやり取りに見たような、互いに迫るような一瞬が起こり得る、そんな対話の場を起こしたい。それが、森のはこ舟を経て向かう、私の新たなステージだと思っている。

1989年生まれ。大学卒業後の2013年に農業研修のため西会津町に移住。2013年末から喜多方市に移り住み、NPO法人まちづくり喜多方に所属して『森のはこ舟アートプロジェクト』の立ち上がりから参画。喜多方エリアの主力スタッフとして地域に入り込み、アートに初めて触れる地域住民との関係性構築に貢献した。2016年9月に行われた棚田劇『森の婚礼』では、新婦役を好演。実際の結婚を機に10月に離職。現在は東京に在住し、ありのままに人の言葉を聞く稽古に勤しんでいる。

『楚々木樂舎』終了に思うこと

楚々木集落住人 渡部浩

協力隊員皆々様御苦労様で御座居ます。

生後90数年間、印象に残ることは、第二次大戦はべつとして、楚々木集落で行っていた結婚式、昔からのならわしを、かた取り、現代的に食、農、各方面から調査されまして、人間の和と接しました。

楚々木集落の棚田、今も残る風情、それを活用され、美術家岩間賢講師、五十嵐恵太先生、県内外から大勢ご協力下され、感謝いたします。棚田劇森の婚礼、2016年9月24日森の自然で、棚田劇場は三ヶ所に設置され。

数ヶ月前から陰陽の別なく、講師の陣頭で行われていたこと脳裏から離れません。

9月24日当日、花嫁佐川花婿鈴木両家代表到着、粗茶を呑みながら、婚礼順番をおしえてくれました。楽隊2名、舞踏師、歌手、つきとおひさま主、外数名のお手伝いさん。

花嫁ドレスに江畑協力隊員初めて作ったワラジはき、髪には草、木、花、アケビの実等、かざられ重かったと思います。

喜一中生が制作した、きつねの面を頭に乗せ、楽隊先頭、古い長持、両家代表、花嫁、花婿、舞手、高校生と参加され、畑用小路を歩き観客はすぐ下の農道で見上げて拍手が自然の森に伝わって止めませんでした。

第一幕　楚々木の宝行列、
第二幕　長持ち引渡し、
第三幕　餅のなる木、青葉上で歌。その下、つきたて、塗椀に黄粉餅、数百名に上げれ
第四幕　三三九度、棚田大会場、○形に椅子、長い木3本結び、舞踏師、頂上舞ふ姿見上げなが盃戴
第五幕　台所廻り、舞子さんと共に舞いながら。
第六幕　大棚田会場、画家凄く、おほきな、つる、亀、三宝、島台の木の下で、赤塗り膳、食数品御馳走になりながら樽ころがしのぞき込み、森の人、指輪交換楚々木の木を利用し、清水協力員制作してくれた品。

マジックショウ、ソバ口上楚々木住民等。

秋の日は短く、最後に本公演芸術総監督、岩間賢講師のあいさつで終止されました。森、山、谷等、亦小高いおかでは集落永代の御先祖様、観音様も開百以来なかった芸術祭を視てくださったことと思います。後片付けも数日かかり、町に楚々木をもって行く、市主催最終の朝市で、子友と出店、温かい汁を作り、買物客をよろこばせ、上京されました。

新鋭美術家市協力隊員江畑さんは小楚々木地区の緯度と経度37.6885100.139.9472832調査され外数点、成田画家数点、市内三十八間蔵で展示され市民から親しまれて居ります。12月4日集落余水を道路消雪人足反省会に森のはこ舟、事務局五十嵐先生来楚され、森のはこ舟、県の指示で終わりの知せを。お開きいたしました。

時代の流れと思います。楚々木に偉大なる足跡を残してくれた皆々様、終生忘れ得ること出来ません。本年の豪雪は近年なく4月になれば福寿草も咲き、山菜も若芽を出すでせう。再開を御まちして居ります。

合掌

1921年生まれ。『楚々木樂舎』の活動への理解者として、数多くの場面で助けていただき、さまざまなお願いにもいつも笑顔で応えていただいた。森での生活の中で培った、たくましさと豊富な知識を持つ。その人となりはかけがえなく、関わった方みなに慕われている。

3年間の活動を終えて

喜多方エリアコーディネーター 五十嵐恵太

喜多方エリアの活動で特徴的な点は、岩間さん、稲垣さんというフィールドワーク（調査活動、聞き取り、地域との連携）に重点を置くアーティストと、長期的な視点で“喜多方の森”の人や文化の再発見、再認識を、新たな視点でどう活用していくかを模索したことと言えます。打ち上げ花火的なイベントとは異なり、もぞもぞとしたアーティストの動きは、少しずつですが地域の人に受け入れられ、長期の関わりならではの新しい活動への兆しが垣間見えてきました。もともと、2018年に福島県南相馬市で行われる植樹祭の連携プロジェクトの側面も期待されていた『森のはこ舟アートプロジェクト』は目標としていた5年の活動には至らず、3年で終了することとなりました。アーティストの岩間さんは、「森のはこ舟は擱座（かくざ）した」とおっしゃいました。かくざとは、“船舶が浅瀬、暗礁に乗り上げて動けなくなること。座礁。”です。喜多方のプロジェクトは終了していない、目標を達成できていないのです。舟に荷を積んで、「さあ、これから！」というところでした。岩間さん、稲垣さん、それぞれが、引き続き喜多方での活動継続を希望され、喜多方WGとしても方策を考えているところです。

活動の副産物として、喜多方に興味を持って移り住んでくれた若者がたくさんいます。アートが喜多方のもともとの魅力を更に磨き上げて、発信をしてくれています。困難な状況に至っても、頼れる人が増えていることがとても心強いです。

はこ舟に載せた宝物をどこにどのようにつなぐことが正解なのか、誰にもわかりません。プロジェクトの成果は時間が経って振り返ったときに見えてくるものもあると思います。楚々木集落の小楚々木は2軒を残すのみ。楚々木の地の記憶を訪れた人に残した、棚田劇『森の婚礼』を実施できたことは、本当にいろんな意味でぎりぎり間に合ったことなのかもしれません。

西会津エリア

2016 Schedule

5月	2016年度西会津WG会議 パートナーシッププログラム「草木をまとって山のかみさま」準備開始 「にしあいづ・縄文と森のがっこう」リサーチチーム結成
6/11	パートナーシッププログラム「草木をまとって山のかみさま」開催
6/25-9/4	「にしあいづ・縄文と森のがっこう」縄文と音の森 展示開催
7/11	「にしあいづ・縄文と森のがっこう」縄文勉強会 講師:佐藤光義先生
7/30	「にしあいづ・縄文と森のがっこう」小さな土器を焼くワークショップ 開催
8月	「森を漉く」ワークショップ準備開始
9月	「にしあいづ・縄文と森のがっこう」縄文ギフト プロジェクト リサーチ開始
9/22	「森を漉く」ワークショップ開催
10/16	パートナーシッププログラム「草木塔ワークショップ」開催
10月	「にしあいづ・縄文と森のがっこう」縄文ギフト ヒアリングリサーチ
11/30	「にしあいづ・縄文と森のがっこう」縄文勉強会
12月	「にしあいづ・縄文と森のがっこう」縄文ギフト プロジェクト 概要決定
1月	「にしあいづ・縄文と森のがっこう」縄文ギフト プロジェクト 準備開始 「森を漉く」成果展示会 準備
2月	「にしあいづ・縄文と森のがっこう」縄文ギフト プロジェクト 準備 「森を漉く」成果展示会 準備
3/18	「森を漉く」成果展示会開始
3/19-20	「にしあいづ・縄文と森のがっこう」縄文ギフト イベント開催

福島県と新潟県の県境に位置する西会津町。会津と新潟を繋ぐ街道の宿場町の面影と、山間地の自然の豊かさが魅力。町内にある大山祇神社は通称“山の神”。山で働く者を守ってくれる神様がいる、森の祈りのエリアです。

にしあいづ・縄文と森のがっこう

プログラム概要

西会津に点在する縄文の遺跡や地層、太古の記憶と当時の人々の価値観などを調査/想像しながら、自然の中での共生の価値観を紐解きつつ、リサーチなどでわかったことを少しずつアート表現していくプロジェクト。縄文時代は、初めてムラという定住社会が発生した時代とされているが、それによって、ムラ・ハラ・ヤマという自然界の中に人間が定義付けた空間的秩序が生まれたと言う。このムラ・ハラ・ヤマという空間秩序は、狩猟が農耕に姿を変え、生活様式こそ大きく変化したが、つい最近まで東北の農村集落の空間構成にもその秩序の継承が見られた。このような空間秩序の上で、長い歴史の間の生活パターンによって生じた2次自然生態系（人為的干渉が強い自然）は、これからの未来にも学びのある“自然共生”のあり方を導く“森林文化”の基盤環境であり、その起源である縄文《社会》の姿がどのようなものであったかを想像することは、森林文化の再生のみならず、新たな森林文化の創出の大きな手がかりになるのではないだろうか。リサーチチームを結成し縄文勉強会などを開催し縄文に関する調査を進めながら、アーティストだけでなくさまざまな人を巻き込む仕掛けを展開した。

地域への影響など

縄文と聞いても、これまでは特定の考古学好きが興味を持つだけで、自分たちには全く関係のない存在だと思われていた時代であった。しかし、本プロジェクトのさまざまなリサーチを通して、そこに関わった西会津の若者が、実は日本の暮らしや文化の基盤が縄文時代に生まれ、それが現代の我々の何気ない習慣などに影響していることに気付き始め、西会津という風土に住む“意味”や“意義”を見出す上で重要な学びとなった。また、リサーチの過程を“土器づくり”、“音”、“食や情報伝達”の視点からワークショップや展示として表現した今回の手法は、縄文時代にこれまで興味ながなかった層へ、その面白さを訴求する効果もあったように思う。

縄文の音の森展

西会津町で出土した膨大な数の縄文土器のうち、約40点の土器を西会津町で初めて展示会として開催した西会津の縄文土器展。その会場に、西会津の自然の音をフィールドレコーディングした素材を元に縄文人が聞いたであろうの音風景を想起させるサウンドインスタレーションを展開。会場中央には太鼓として使われていたのではないか、と言われる“有孔鍔付土器”を展示し、その中から縄文時代の音風景が会場に流れ出てきているかのような展示のしかけとした。日本語の原点、そして縄文語の中心であったかもしれないオノマトペ。その源である森や風、水、火の音風景に潜む自然界の共通言語を少しでも感じることができただろうか?

Artist　星野 貴信

1964年生まれ。法政大学社会学部卒。2013年音楽レーベルOtO設立。フィールドレコーディング、その他の実験的な音響をフィーチャーしたsound artistの作品をCDリリースしている。オランダ、ギリシャのsound artistなどとのコラボレーション作品多数。2014年第9回ギャラリータグボートアワード入選（写真作品）。

Artist　大岡 真一郎

1979年生まれ。（ICHI）電子音楽家。コンピューターとピアノを用いた楽曲制作スタイルで先端テクノロジーや地域文化とのコラボレーション、広告メディアへの楽曲提供など幅広いジャンルで活動。ロボットバンド『Z-MACHINES（第17回文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品）』への楽曲提供、バルコ主催『天神ラボ』での特別ライブやデジタルサイネージの映像/音楽編集、森のはこ舟アートプロジェクト『幻のレストラン～西方街道・海と山の結婚式～』アーカイブ動画の作曲など。

Data　【来場者】1374人　【会場】西会津国際芸術村

小さな土器を焼くワークショップ

アーティストの吉田富久一さんを中心としたアーティスト集団、《社会芸術／ユニット・ウルス》による炭焼きでの『小さな土器を焼くワークショップ』、考古造形研究所の森山哲和さんによる縄文土器の文様に関する新説のレクチャー、そして西会津町教育委員会とのコラボによりフリーペーパー『縄文ZINE』の編集長のミニトークなども開催した。今回の土器づくりは、なんと火鉢の中に炭を炊いて、その中でたった3時間で土器を焼くという手法。ユニットウルスのこれまでの縄文土器焼きに関するリサーチの結果、縄文人は炭で土器を焼いていたのではないか?という仮説を実験するワークショップでもあった。縄文時代のミステリーを、アートを通じて理解していこうという試みである。

Artist

吉田 富久一

1953年生まれ。1978年多摩美術大学大学院修了。社会芸術代表。国内外の展覧会、社会芸術に関する執筆・出版多数。87～01年 アートハウス、02年『社会芸術展“THE 市場”』企画に当たり《社会芸術》設立。“創造性の共有”を標榜しユニット活動を開始。作品収蔵：京都国立近代美術館、群馬県立近代美術館、高崎市美術館、エン・ハロット美術館（ISL）、レオポルド・ホーチ美術館（DEU）、玉村町平和モニュメント、ほか。

Data

【参加者】20人
【会場】西会津国際芸術村
【掲載メディア】福島民友新聞

食の伝達・縄文ギフト

縄文時代の遺跡が多く見つかる西会津町と三島町。当時の縄文人たちは集落間で交流をはかりながら生活をしていたことが想像できる。集落の多くは食料確保ができる場所に作られており、当時は食料そのものよりもそれに関する“情報”が大きな価値を持っていたようだ。文字が無い縄文時代に、集落間のコミュニケーションはどのように行われていたのだろうか。『食の伝達・縄文ギフト』は西方街道で隣町の西会津と三島の間で立ち上げた縄文的“情報交換”を実践／体験するプロジェクトである。リサーチチームを立ち上げ調査を重ね、最終的にはアーティストのEAT&ART TAROさん考案の縄文料理レシピと、火起こしや黒曜石ナイフの使い方など“知識”と“情報”を西会津から三島へ人をメディアとして伝達するという2日間に渡るワークショップイベントを開催した。

Artist

EAT & ART TARO

1979年生まれ。アーティスト。食を楽しみ、発見する“場”の創作や“仕組み”を生み出すアート活動を展開。これまでの主な活動に、2009年墨田/墨東まち見世『向島缶詰アーカイブ』、2012年、新潟県／越後妻有トリエンナーレ『越後妻有フード記』、2013年、香川県／瀬戸内国際芸術祭『島スープ』、2014年千葉県／中房総国際芸術祭市原アート×ミックス『おにぎりのための、毎週運動会』など。現在、全国各地でプロジェクト進行中。

Data

【参加者】14人
【会場】
西会津国際芸術村（西会津）
ゲストハウス ソコカシコ（三島）

森を漉く

プログラム概要

かつて西会津地域の重要な生業のひとつであった出ヶ原和紙。2015年のパートナーシッププログラムでは、その復活再生を試み、かつての和紙製造方法の調査研究や、実際に使われていた道具の収集、原料となる楮の探索から和紙の生成を行い、ワークショップ形式で紙漉きの体験をした。今年度は、出ヶ原和紙(伝統技法)についてのレクチャーワークショップを行い、出ヶ原和紙についての理解を周知させるとともに、和紙と風土の関係性、和紙生成における水の重要性など、生態系の中での和紙について考察しながら、和紙を漉くワークショップを開催した。また、漉いた和紙を顕微鏡撮影や顕微鏡プロジェクターなどで投影し、和紙の中に鋤き込まれた森の小宇宙を表現する展示を西会津国際芸術村等にて展示開催した。

地域への影響など

パートナーシッププログラムである出ヶ原和紙復活再生プロジェクトは、これまでの西会津町の歴史の中で和紙づくりに関わったお年寄りの記憶や技法、実際に使っていた道具など、何もしなければそのまま消滅してしまっていたかも知れない情報をアーカイブすることができ、重要な歴史文化資料を地域に提供することができた。また、メディアなどに露出したこと、出ヶ原集落出身の若者に和紙づくりを体験してもらったことにより、出ヶ原和紙の存在を認識する人が増えた。そして、同時にこの『森を漉く』というアートプロジェクトによって紙すきの行為自体が自然と共にあるということを伝えることができた。今後、和紙づくりを継承する人材を育てることができれば、そこから生まれる美術作品や新しい商品など、このプロジェクトが次世代の出ヶ原和紙のあり方についてさらに考えていくための素地となるだろう。

Artist

滝沢 徹也

1977年生まれ。東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻版表現卒業。美術家、和紙職人。2009年小川和紙の技術継承者育成事業を修了後、東京都無形文化財・軍道紙の再生に関わる。伝統的な手漉和紙の研究、製造を行う一方、場の歴史や自然と人間の物づくりの営みの関係をテーマに各地に滞在しながらや絵画や紙を媒介とした制作、展示を行う。近年の主な展覧会として、2011年『International paper art exhibition 』(台湾)、2013年『個展 GANGA・PAPER』(インド)、『AOMORI PRINTトリエンナーレ2014』などがある。

Data

【参加者】11名
【会場】
西会津町奥川地区
寺清水ひろば
【掲載メディア】
福島テレビ
FTVみんなのニュース

草木をまとって山のかみさま(パートナーシッププログラム)

プログラム概要

大山祇神社(778年勧請)をはじめとして数多くの山々が信仰対象として畏れ敬われている西会津町。野山や森林の草花、木々を採集し身にまとうことで“山の神様=精霊”を顕現させ、森が育む水や多様な生命の大切さを再認識しながら発信した。参加者の皆さんには“かみさまカード”を引いてもらい、水の神様、草の神様や花の神様、穀物の神様など、さまざまな神様に成りきって各々草木をまとう。華やかに衣装をまとった神様たちはゆっくりと大山祇神社の神殿へと行進し、観客の皆さんに迎えられて盛大にお披露目をした。今年は、披露時の太鼓の演奏に、篠笛の演奏と草木をまとった猿田彦をイメージした舞踏を加え、参加者だけでなく鑑賞者もより一層“森の精霊”や“山の神様”の世界に入り込めるように工夫し、その内容を濃くできたと実感している。

地域への影響など

初年度は『森のはこ舟アートプロジェクト』の一事業として実施したこのプロジェクトだが、2年目からは西会津国際芸術村を中心に予算を含め全て町民による自主的な運営を行い、継続している。3年目を迎えた頃には、地域住民からも、大山祇神社の門前町に他にもアートで賑わいを作り出せないか、というような提案が出てきたり、町のPRイベントへの出展依頼も多くなってきたりしている。今後も継続していくことにより、月日を経てゆっくりと地域へと浸透し、アートと神社の結びつきがひとつの新しい町づくりにつながっていきそうな、西会津町の大切なイベントとなってきている。

Data

【参加者】11人
【観客】約120人
【会場】
大久保地区(大山祇神社)

西会津エリアプログラム

森とアーティスト

アーティスト
EAT&ART TARO

森のはこ舟では、三島町や西会津町でプロジェクトを行う機会をいただいた。それまでほとんど福島には来たことがなく会津は初めてだった。僕の出身は神奈川県の私鉄沿線沿いで、森のない東京のベットタウン。そんな僕に奥会津はとても個性的に映った。もちろん豪雪、過疎の問題、クマの話もビックリだし、三泣きにも驚いた。だがなにより“地域”への意識が違う。特にアートプロジェクトで出会う人だからかもしれないが、ここに住むこと、ここでプロジェクトに生きるという決意のようなものすら感じてしまう。3.11への意識も違うだろう。僕はその時東京にいたけども、その感覚、考え方、距離感は比べられるものではない。僕は自分の生まれた地域にあまり思い入れは無いんだなと、会津に来るようになってから思うようになった。僕は芸術祭やアートプロジェクトなどで出張する機会があるので色々な地域に行くが、どの地域に行っても僕は初心者で、各地でいろいろ教えてもらっている。アーティストなのに毎回教わってばかり、移住予定があるわけでもない。でもそんな人間がふらふらと行っていろいろ教わったり、対話することが大切だと思っている。もしもそこで地域の人が「あなたはこの土地に住んだことがないから、わからないでしょう」という話になってしまったら、対話もできないし、あらゆることが上手くいかないと思っている。それはすべてを停止させてしまう危険な言葉だ。すべての人生はオリジナルだし経験も考えも違う。経験値の違う人間と対話し作品を通したりしながらいろいろな考えや思いを垣間見るのだ。それがとても大切なことだと思っている。森のはこ舟で、森の初心者である僕は多くのことを教えてもらい、いろいろ対話させてもらった。些細な言葉を交わしただけだとしてもアーティストは差異を発見して面白がることができ、それを伝播する媒体にもなれる。媒体となり他の人に何かを伝えることができるのがアーティストの仕事だとも思っている。それはいつ芽吹くかはわからないが、この森での経験は双方にとって何かにつながっていってくれると思っている。

『森のはこ舟』が作った道筋

西会津町住人 片岡元治

私が『森のはこ舟アートプロジェクト』に関わろうと思ったきっかけは、西会津町の住民としてこの町にいる限り、ここで起きるイベントを盛り上げたかったから。始まったばかりの頃は西会津ローカルフレンズが主導だったので、その一員としていろいろな役割を担いました。『森のはこ舟』はアートと自然のコラボレーションで福島県の復興を目指して始まった事業ですが、西会津で行ったプログラムでは『草木をまとって山のかみさま』がそれを一番表現できたイベントだったように感じます。『草木塔』ワークショップや、『森を漉く』ワークショップ、もともと自然に関わるイベントや遊びが大好きな私にとって、自然と関わることに特化した『森のはこ舟アートプロジェクト』は楽しかったです。

地域の人は新しいことが発生すると、少なからず興味を持ちます。アーティストが何か変わったことをやっていると、参加していないまでも関心を持ち始めているのを感じます。自然というのは地域の人にとってはいつもの光景。しかしそれを新しいものとして見せてくれるのがアーティストの発想。“アート”という言葉は始めての人にとっては馴染みにくいけれど、“自然”という受け皿が全ての人を受け入れてくれる。自然は人を繋いでくれるし、いろいろなものを受け止めてくれる存在ではないでしょうか。

森林文化は私たちにもともと備わっているもの。でも、当たり前すぎて忘れてしまいがちなものでもあります。もっとそれを自分たちにとっていいもの、有効なもの、楽しいものにできたらいいですよね。『森のはこ舟』はその道筋を作ってくれました。形とかにこだわる必要はなくて、自分たちの足元にあるもので楽しめる方法があるんだよって、そういうことに気付かせてくれたのが『森のはこ舟』だったのかもしれないなと思います。私は何よりその一員としてお手伝いできたことが嬉しい。先頭に立って物事を動かすことは苦手だし、コーディネーターってのにはなれないけれど、これからも「こうでねぃか〜」って言うことはできますから(笑)。

1954年生まれ。農家。西会津で起きるプロジェクトやイベントに積極的に協力していて、『森のはこ舟アートプロジェクト』においてもさまざまな場面で活躍してくださった大切な存在。自身でも自然を題材とした作品を数々作成している。大事にしている言葉は「自然がうれしい」。

3年間の活動を終えて

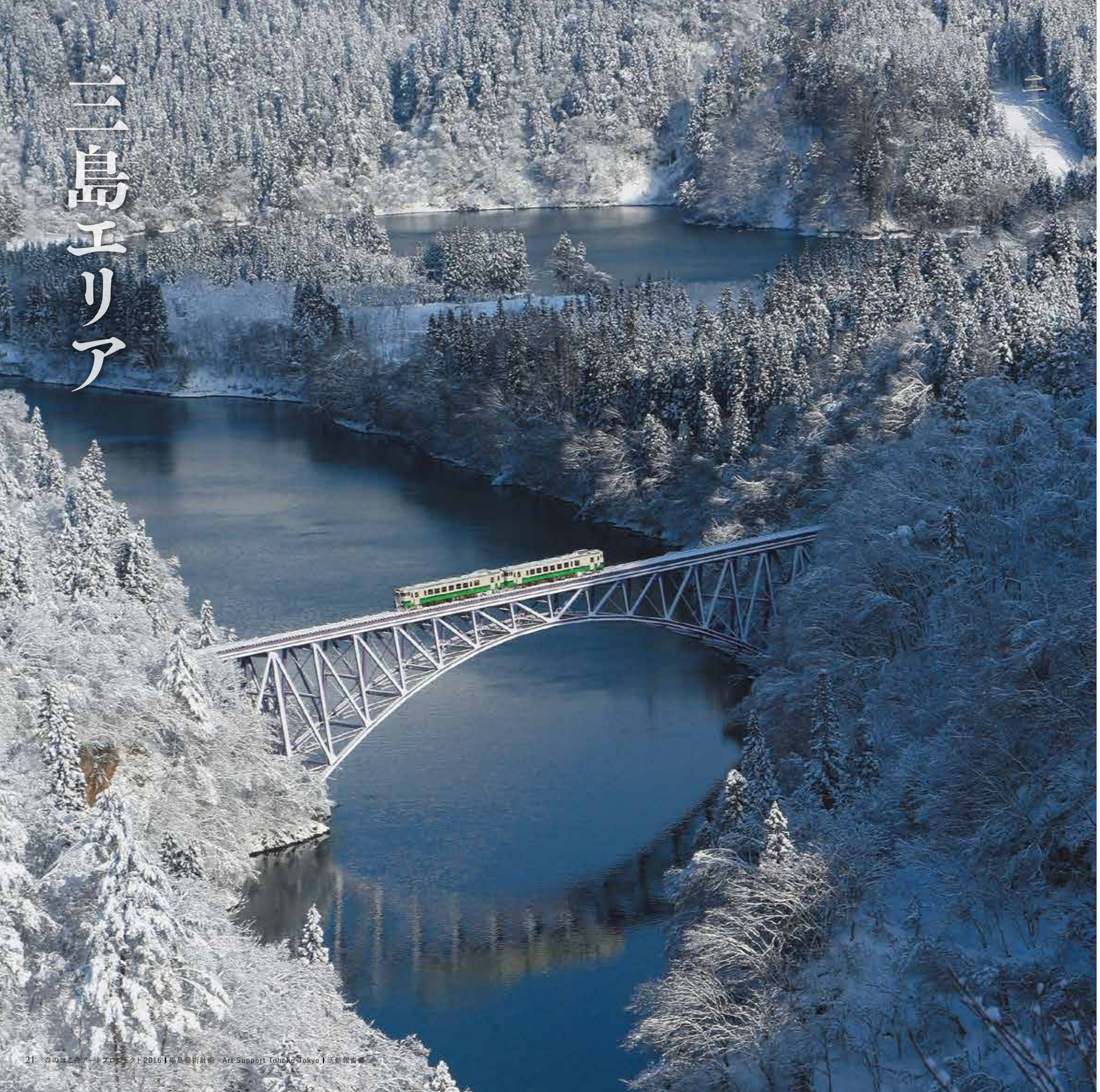
西会津エリアコーディネーター 矢部佳宏

アートが、今まさに消え去ろうとしている森林文化を未来へとつなぐ役割を担うことができるのか。アーティストとどのように関わることが地域のためになるのか。その意味や意義を町の人にどうやったら伝えることができるのか。町の未来に必要なこと、アートコーディネーターとしての私の町に対する考え方をどこまでアーティストに伝え、プロジェクトの中に反映させていけばよいのか。ひとりよがりなプロジェクトになってしまいはしないだろうか。この3年間、そのような事をずっと考えながらコーディネートを実践してきました。

そして今、走り続けてきたこの3年間を客観的に振り返れるようになり、自分の中ではポジティブな変化をみることができています。例えば、“アート”という現象に対する西会津町に住む人の認識。初めの頃は、“珍しいもの”“奇異なもの”“自分には関係のないもの”から、“町に変化をもたらすもの”という認識になってきたのではないかと思っています。2014年に開催した『草木をまとって山のかみさま』は、2年目からは自分たちがアーティストからワークショップを引き継ぎましたが、これが毎年継続して欲しいと言われるイベントとなり、神社のある町並みをアートで盛り上げようというアイデアが住民の側から出てくるまでになりました。その他にも、さまざまなプロジェクトの成果を見た集落の活性化に関わる方から「アーティストを紹介して欲しい」と言う声も聞かれるようにもなりました。このような状況が生まれてくるにつれて、これから私たちは、アーティストから学んだ視点を、自分たちが地域の課題やニーズに応じて活用していく段階に入ってきているのだと思っています。

西会津町は、他の地域同様に過疎高齢化が進み、人口減少が大きな課題となっていますが、私にとっては、人口の減少そのものが地域の消滅ではなく、人口の減少によって地域の文化的DNAが消滅してしまうことが、本当の地域の消滅だと思っています。だからこそ、森林文化をテーマとしてきたこの3年間のプロジェクトリサーチで重視してきた、古来の暮らしのひとつひとつをアートの視点から見直していくということが習慣化し、それをより多くの人に共有できれば、今の地方の構造的な欠陥による人口減少という避けられない運命を、もう少しポジティブなものに変えられると思うのです。古来より培ってきた土地の森林文化のDNAを次世代の風景としてなんとか紡いでいくために最も重要なのは、それらの文化を繋いでいく“人”をいかに生み出していくかに懸かっています。『森のはこ舟アートプロジェクト』はこれで終了となりますが、これからも、このアートプロジェクトを通して見えてきた森林文化の未来を、より多くの人たちと共有しつつ学び合っていきたいと考えています。

三島エリア

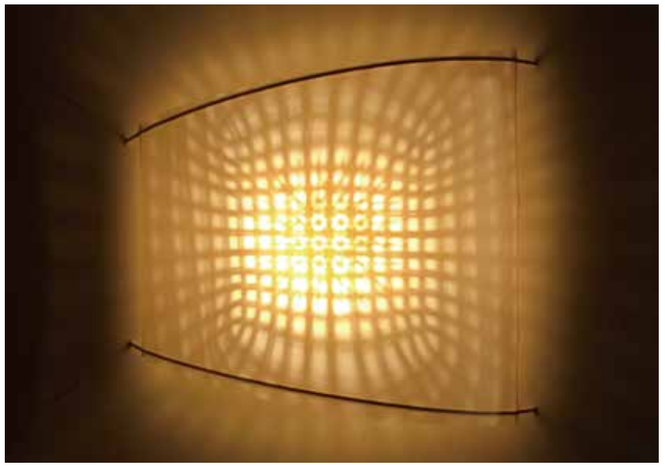


2016 Schedule

8/16	「縄文採集型・古民家リノベーション」壁土リサーチ
8/19	「縄文採集型・古民家リノベーション」壁土採取
9/6-7	「森光水」現場リサーチ
9/15	「縄文採集型・古民家リノベーション」壁土、ススキ、アカソ採取
9/22	「縄文ギフト」リサーチ&打ち合わせ
10/12-13	「森光水」作品制作打ち合わせ
10/18	「縄文ギフト」きのこ採取
10/30-31	「縄文採集型・古民家リノベーション」和紙作品、サンプル制作
11/13-15 11/18-22	「縄文採集型・古民家リノベーション」和紙作品制作
11/29-30	「縄文ギフト」打ち合わせ、リサーチ
12/5-6	「森光水」作品設置作業、作品制作打合せ
12/12-13	「森光水」作品設置作業
12/28-29	「縄文採集型・古民家リノベーション」和紙作品制作
1/29	「縄文採集型・古民家リノベーション」左官ワークショップ
2/9-12	「森光水」筑波大学・作品設置作業
3/11-19	三島エリア成果展
3/19-20	「縄文ギフト」

三島町は面積の85%以上が森に囲まれた人口1700人に満たない山間の小さな町です。また1年の半分は雪に覆われる日本有数の豪雪地帯でもあります。
三島エリアは、雪国の厳しい自然環境を生き抜く山村の豊かな暮らしの知恵が今も色濃く残っているエリアです。

森光水 -Natural Energy Valley MISHIMA-



三島エリアプログラム

プログラム概要

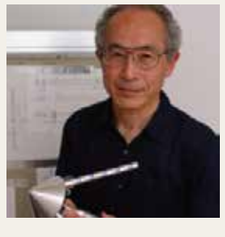
アーティスト・逢坂卓郎、筑波大学、NPO法人会津みしま自然エネルギー研究会の協働により初年度から展開してきた自然エネルギーによるライトアートプロジェクトの3年目。今年度は、三島町の伝統的工芸品である編組細工をモチーフとした光の作品を、逢坂氏と地域おこし協力隊として三島町にて編み組み細工を習得している清水夏穂氏が協働して制作した。それらの作品は全て古民家に設置した3枚の太陽ソーラーパネルによる自然エネルギーで点灯する仕組みとなっている。また太陽ソーラーパネルの蓄電残量が分かる装置を筑波大学芸術学系助教・村上史明氏が制作し、村上氏の授業を履修した学生11名により、発電残量がわかる光の作品を制作した。

地域への影響など

逢坂氏や筑波大学が作品を設置した古民家は、今後ゲストハウスとして活用される予定である。そして、古民家の照明はすべて3枚の太陽ソーラーパネルの電力で賄う予定となっており、電気が足りなくなった時（学生の制作した作品を見ると蓄電残量がわかる）、節電して、蝋燭の灯りに切り替わる。それによりゲストハウスの宿泊客などが蝋燭の火の周りに集まり、間接的なコミュニケーションツールとしても機能するように考えられている。本プロジェクトは初年度から東日本大震災の原発事故によって気付かされたエネルギーの問題をテーマの中心に掲げてきた。今後この古民家で風土に即したエネルギーを使った新しい価値観やライフスタイルを提案し、広く発信していくことは、本年をもって終了する『森のはこ舟アートプロジェクト』の成果を末長く残していくことになり、三島町の活性化につながることも期待できる。

Artist

逢坂卓郎



1948年生まれ。アーティスト。日本のライトアートの草分け的存在。宇宙線の信号がLEDの光に変換される『宇宙線シリーズ』、2000年の皆既月食時に棚田に設置された18個の巨大な鏡が月光を捕らえる『ルナ-プロジェクト』は宇宙をテーマとした代表的な作品。2008、09、11年に国際宇宙ステーション内で芸術実験を実施。国内とヨーロッパの主な美術館で展覧会を開催。現在、筑波大学芸術系特命教授。

Data

【成果展来場者】120人
【会場】ゲストハウス　ソコカシコ
【掲載メディア】
福島民報

縄文採集型・古民家リノベーション

三島エリアプログラム

プログラム概要

三島町にある縄文時代晩期からの遺跡、荒屋敷（あらやしき）遺跡の上に建つ古民家を縄文時代のライフスタイルである“狩猟採集”生活の中の“採集”の部分に着目し、山に囲まれた三島町の足元にある自然素材や、会津地域にある古材や民具を採集して、それらの素材を用いて再生させたプロジェクト。本プロジェクトの主な取り組みとして和紙を扱うアーティスト・滝沢徹也氏の協力により、三島町の伝統的工芸品である編組細工に使われる自然素材、山葡萄蔓、ヒロロ（ミヤマカンスゲ）、クルミ皮、藁、モワダ（シナの木の皮）を繊維にして襖用の和紙を制作した。また三島町浅岐地区の壁土を採取し、その土を使った左官ワークショップを開催した。

地域への影響など

本プロジェクトで採取した壁土は、本来三島町のどの集落にもあり、かつては蔵や民家の壁土、田んぼの水止めなどに広く使われていたが、ライフスタイルの変化した現代においては、もはや集落のどこで壁土が採取できるのか住民もほとんどわからなくなっているのが現状だった。本プロジェクトを通じて壁土の採取場所を再確認し、どのように左官材として仕立てるのかを学ぶことができた経験は、過疎高齢化に伴い空き家が増えている三島町において、今後の空き家再生においても大いに活用が期待できる。また、本プロジェクトによって再生された古民家は、今後三島町の地域活性化の拠点として機能させていく予定である。

Artist

樋口裕一

1982年生まれ。造形作家。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業。2016年6月より西会津町奥川に移住。土地の物質的、文化的資源を活用した空間を造形する他、移動式である屋台制作・パフォーマンスも行っている。

Data

【ワークショップ参加者】10人
【成果展来場者】120人
【会場】ゲストハウス　ソコカシコ
【掲載メディア】
福島民報

“森・光・水”から“其処・彼処”へ

アーティスト
逢坂卓郎

【はじめに】

東日本大震災後の2013年に、筑波大学の芸術の教員たちが、CR：(Creative Re-construction)多領域と芸術の融合による創造的復興教育プログラムを立ち上げました。CRの目的は被災地復興のために課題を発見し問題解決の方法論の構築と実践を行う人材の育成でした。試行錯誤する中で『森のはこ舟アートプロジェクト』に参加する機会をいただきました。活動のフィールドとなった会津三島町は電線が切断されるほどの豪雪地帯で、過疎化、高齢化が大きな問題でした。しかし、このことは震災以前から日本の地方が抱えていた課題でもあったのです。私を課題のカオスから覚醒させたのは、日本の原風景とも呼べる美しい里山と三島町を愛して止まない人々、そしてマイクロ水力発電機を開発していたNPO法人会津みしま自然エネルギー研究会との出会いからでした。

【“森・光・水”】

中山間地域で日本の社会的な問題の解決につながるアート実験が始まりました。今では有名になりましたが「創ることは生きることだ」という、ある被災者の言葉は私の背中を前に押してくれました。「町の方々と学生たちが世代を超え、白い雪原を背景に再生エネルギーだけを使用した光の展覧会“森・光・水”を共同制作する」。私の目の前にイメージが立ち現れました。その実現に向けて、町の方々へプランの説明会を数回開催し協力をお願いしました。また、教員、学生による春と秋のリサーチは展覧会場の下見、町の歴史学者の話を受講、伝承工芸の編み組み細工の工房見学、サイノカミ祭りへの参加などを通して交流を深め、学生プランのプレゼンも行いました。自然エネルギー研究会には、7台の水力発電機を制作いただき、筑波大学村上先生によるストーブ熱による熱発電とオリジナル電流制御回路の開発などが加わり、2015年1月に再生エネルギーのみによる光の展覧会が誕生したのです。翌年2月の展覧会では、会場の背景となる杉林をライトアップする為に、不足な電力をエコ・パワー株式会社会津若松ウインドファームから提供いただきました。そして、その電力を電気自動車に蓄電して会場へ運搬するという、離れ業を行いました。三島町からは学生と作品の運搬、宿泊などについて多大な支援をいただきました。2回開催された展覧会はいずれも福島テレビをはじめ、多くのメディアに紹介されました。

【展望“其処・彼処”】

課題は1年に1回のイベントで終わってしまい、町の方々との連携が継続しないことでした。そのような中で、再生エネルギーのみによるゲストハウスを空き家のリニューアルによってスタートさせる事業が三澤真也氏により始められました。内装は地域の土と草を混ぜた左官をベースに、編み組みの蓑などを漉き込んだ和紙による襖、会津木綿のクッション、そして、生活工芸館の協力を得て、編み組み細工の陰影を生かした照明などが納められています。ソーラーシステムが稼動を始めましたが、電力が充分でない時はロウソク灯でゲストを迎えることでも良いと考えています。三澤氏は三島町の森のツアー、木こりや猟のツアーなどを企画し、食をも含めた豊かな地産を多くの人々へ提供することで地域の課題解決へ取り組もうとしています。さらに私は三島町が照明や自動車メーカーが興味を示している『国際編み組みあかりデザインコンペ』や『中山間地域におけるHEMSとハイブリッド照明モデルの開発』、『再生エネルギー新交通システムの実験』のプロジェクトを実現させるに相応しいフィールドであると考えています。

アートとは創り交わることで違う次元へ私たちを運び、覚醒させる力であるということを、3年間の取り組みにより改めて知ることができました。ゲストハウス“其処・彼処”が新しいライフスタイルの提案へ向けて、地方からの実践的な発信基地となることを期待しています。

3年間の活動を終えて

三島エリアコーディネーター **三澤真也**

<はこ舟が辿り着いた場所>

三島エリアでは初年度から延べ12のプロジェクトを展開してきましたが、3年間の航路を振り返ると、それらすべてのプロジェクトが大型芸術祭のような観光客誘致を目的としたプロジェクトではありませんでした。

三島町が取り組んできたプロジェクトは、三島町に住んでいる地域住民のためのプロジェクトであり、アートを媒介として地域コミュニティの形成や、この土地の豊かさを見つめ直し、面白い地域を創るためのプロジェクトでした。

そのような方向へ舵を切っていった直接的な理由は、都市部からのアクセスの悪さや予算規模の問題があったかと思います。けれども、そういった向かい風に靡(なび)かれながらも森のはこ舟が辿り着いた、

「一過性の観光客を呼び込む視点から、あえて内向きな、ここで暮らす自分たち自身が豊かになるためのツールとして、アートを利用する」

といった試みは、結果的にこのアートプロジェクトの大きな功績になったのではないかと思っています。

過疎高齢化の進む三島町には、存続すら危ぶまれる集落が出始めています。そういった中山間地域で集落が存続していくために一番必要なことは“地域コミュニティが楽しい雰囲気を醸し出すこと”のような気がしています。それが一過性の観光客ではない、新たな定住者を呼び込む鍵だと思っています。既存のコミュニティが成立しなくなりつつある状況の中で、アートというツールを用いることによって、地域コミュニティのつながりを取り戻すことができるかもしれない。そういった新たな関係性の作り方が、「本当にこの場所で生活していくことが楽しい!」と思えるコミュニティを育んでいくきっかけになるのかもしれない。そんな可能性の岸辺が見えてきたことが、この3年間の旅路の成果で、次なる冒険への入り口なのかもしれません。

三島エリアプログラム

猪苗代エリア

2016 Schedule

8月	「森の氷本」打ち合わせ、リサーチ
9/30-10/11	「森の氷本」準備
10/1-2	「森の氷本」 「氷本のための骨格づくり」ワークショップ
10/8-9	「森の氷本」 「氷本のための採集」ワークショップ
11月	雪吊り研修
2/1-13	「森の氷本」制作期間
2/4-5	「森の氷本」 「森の氷本づくり」ワークショップ
2/12	「森の氷本」 「しぶき氷で遊ぶ　森の氷本アート」

猪苗代湖と磐梯山を擁する猪苗代町。はじまりの美術館との協働で、猪苗代の森や木々、輝く雪や湖水をテーマに、現代美術家・木村崇人が自然と触れ合えるアートプロジェクトを展開しました。

森の氷本

プログラム概要

猪苗代エリアでは寒さや雪かきに追われ地域の人達が敬遠する冬季を主な活動の時期とした。冬の風物詩である“しぶき氷”は、猪苗代の寒さ、磐梯山から吹き下ろす風、そして人工の護岸工事の影響が組み合わさり発生し、町の方が見つけ出し“しぶき氷”と名付けられたもの。発見されてから約25年。しぶき氷も、森のように少しずつ文化になっていくのではないかと考える。

アーティスト・木村崇人は、そんな“しぶき氷”に着目し、猪苗代の文化や森の素材などを凍らせて標本のような作品が作れないかと考え、今回『森の氷本（ひょうほん）』を実施した。猪苗代の森や自然の力を借りて行われるこのプロジェクトを通して、“しぶき氷”を地域の方々と森のように守り育てていければと考えた。また、そこから、暮らしから離れつつある“森”自体を見つめ直すことにつながっていくことを目指した。

地域への影響など

猪苗代の多くの方にとって冬の雪や寒さにはマイナスイメージがある。しかし、冬にはまた特有の地域文化があり、リサーチや素材集めの過程で、猪苗代特有のさまざまな文化や技術に出会い、地域住民の方の協力を得ながら徐々に作品を作り上げて行った。仕上げとなる着氷作業では、気温と風と雪というこの土地ならではの自然条件が加わり、『森の氷本』という作品が完成した。制作過程や公開イベントも含め、寒いこの時期に外に出て楽しむということが地域の方にとっては新鮮に映ったよう。またできあがった作品は他ではなかなか見ることのできないもので、また来年も見たいといった声や、もっとこうしたほうが良いのではといった感想を聞くことができた。このプログラムを通じて、一見過酷な冬のこの地域の魅力に気付く機会となった。

Artist

木村崇人

1971年生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科博士課程修了。1998年から「地球と遊ぶ」をテーマに作品を制作。目に見えない地球の力を視覚化し、実際に体で感じる事ができる体験型作品を中心に展開している。ワークショップも国内外で数多く発表。代表作には、木もれ陽をさまざまな形に変える『木もれ陽プロジェクト』、光の特性を利用して作家自身が歩いて感じた森を表現した『森シリーズ』、目の位置を変える事で、巨人の視覚を体験することができる『ガリバーシリーズ』、風見鳥を群生させて風の姿を知覚することができる『風見鳥シリーズ』などがある。2004年より『地球と遊ぶプロジェクト』代表。

Data

【動員延数】約200人
【会場】はじまりの美術館
旧山潟小学校 ほか
【掲載メディア】
NHK福島、
福島中央テレビ、
福島民報、河北新報

氷本のための骨格づくり

農家の方からハウスの骨を借り、それらを組み立て、森の氷本の骨格となる部分を制作した。

氷本のための採集ワークショップ

作家と森の中でフィールドワークを行いながら、森から蔓やツタなどの素材を採集した。また、“未来に残したい猪苗代のもの”の絵を描いたり、だんごさしを作ったりして、氷本に吊るす素材を作った。

森の氷本づくりワークショップ

秋に準備したものの設置を行った。また、『森の氷本』への着氷のために試行錯誤を繰り返した。

しぶき氷で遊ぶ 森の氷本アート

『森の氷本』をみんなで囲んで過ごす、特別な1日。氷本の中に入ったり、氷に触れたりして、自然の力を感じた。会場内では、木村崇人によるアーティストトーク、猪苗代自然を守る会代表の鬼多見賢による“しぶき氷”トーク、町民主体のつながるマルシェ『つながるしぇ』などが開催された。

“想定外”を遊ぶ

アーティスト
木村崇人

『森の氷本』は福島の自然と人間の知恵を強く融合することを目指した実験的作品で、完成まで予期せぬ出来事の連続だった。制作過程でこれまで自分の知らなかった自然の姿に接した。それは、危なさ、怖さであったり、一方で美しさ、神秘性であったり。今回のプロジェクトは“自然と遊ぶ”というより、“自然に遊ばれた”経験となった。

自分が自然をコントロールしていると自負した時点で、自然は「なめるなよ」とメッセージを発信する。実際に人工的に“しぶき氷”をつくる過程で、美しい形が完成し、もう崩れないと安心していたその矢先、見事にすべてが崩れてしまう出来事が発生。イベント3日前のことだった。途方にくれながらも、改めて気付かされたのは、作品に自然を取り込む以上、自然には予測不能な部分があるという点を常に意識していく必要があるということだった。スタッフの協力を得て、2度目の作品制作を急ピッチで行い、遊園地をイメージとした“しぶき氷”進化版を何とかイベント前日に完成。緊張感溢れる日々は今でも強く印象に残っている。

“しぶき氷”をイメージした着氷の実験は複数の条件をそろえる必要があり、猪苗代の何処でも出来る現象ではない。まず、何回も現地に足を運ぶことでわかったのだが、気温や山の位置など立地から起こる風向きと強さ、そしてしぶきの代わりとなる放水方法など、変化する自然環境を考慮して装置を調整する必要がある。今回は幸いにも好条件の中で、人工的に“しぶき氷”を作り出す着氷実験に成功した。そして、この地域で育まれた“雪吊り”、すなわち人間が自然に向き合った行為から生まれた技術を取り入れることで雪の重さに耐えられる状態にした。現地の人間の知恵が不可欠であった。さらに、前向きな思考である。作品制作時の冬の福島は寒い。一般的に寒さを喜べる時は少ないが、寒さを求める作品を目的とすることで、マイナスになりがちな感情をプラスに転換することが可能だ。寒さを喜び楽しいと思う非日常の感情をスタッフと楽しむことができた。

加えて、作品の中に地域ならではの要素を取り入れた。“つるし雛”など地域の人々の暮らしや文化に着目し、彼らの日常品の使い方を変えることで、アートによって新しい気付きをもたらしたいと思ったからだ。

今回で『森のはこ舟アートプロジェクト』は終わりだが、人工的に“しぶき氷”に近い氷の表情が制作できる事が分かり、イベントや祭りになる可能性があると思った。今後、この気付きを進化させ、もっと遊べるのではないだろうか?今回のプロジェクトを通して興味を持った人が、次のステップへ行動してくれたら、福島の冬がもっと楽しい季節になるのではないだろうか?たとえば、“しぶき氷”を鑑賞するだけでなく、作って遊べる知識や技術のある町になったら面白いと思う。地元の人たちやスタッフも交えて行った活動故に、次の展開に発展しそうな結果の見えた作品だった。

2年間の活動を終えて

猪苗代エリアコーディネーター 岡部兼芳

猪苗代エリアは2015年の秋から『森のはこ舟アートプロジェクト』に参加しました。特徴的な点は冬の時期をメインとしたことです。地域の方々は基本的に雪や冬に対してのマイナスイメージが強く、冬は春を待ちじっと耐えるものだという方が多いです。そんななか、冬の寒さや猪苗代の気候が作り出す“しぶき氷”という造形に、猪苗代エリアの参加アーティストである木村崇人さんが興味を持たれたことからプログラムの構想がはじまりました。

リサーチをすすめていくと“しぶき氷”は湖岸の護岸工事と磐梯山から吹き下ろす風、そして凍りつくような冬の寒さによって発生した現象であることがわかりました。1年目はイメージ作りのために美術館で『氷の動物園をつくろう!』と題しワークショップを開催しましたが、雪も少なく暖冬で凍らせることができませんでした。

2年目はさらに発想を広げ、猪苗代エリアプログラムとして『森の氷本』が生まれます。氷本とは“標本”をもじった造語で、凍らせることで未来に残したいものを表現しようと考えました。猪苗代町は農業と観光で栄えてきた地域です。そんな特徴や地域の伝統的な文化も取り入れようと地域の方々の協力も得てプログラムを進めました。今回は“だんごさし”“つるし雛”“雪吊り”の要素を取り入れています。子どもたちの成長を願う“つるし雛”から未来に残したいものを参加者の方たちと絵に描いて吊るし、骨格となる農業用ハウスが雪の重みで潰れないように、雪国の伝統的な技術である“雪吊り”を地元の名人の方から教わりました。

プログラムを通して、これまで疑問を持たずに行ってきた地域の行事や技術に、アーティストの視点が加わり、地元の方も地域に当たり前にあった物事を客観的に考え、見つめ直す機会になったと思います。そして、このプログラムが最終的にどうなるのだろう?という好奇心は、真冬の寒い中でもみんなで外作業するという行動力になりました。

森は、1本の木の種から芽が出て、長い時間をかけて森になります。そして、その森からの恵みと人の暮らしの関わりの中で、森林文化が育まれてきたと思います。『森の氷本』もまさに自然と人が生み出したものです。そして、自然は人がコントロールできるものではないと学びました。『森のはこ舟アートプロジェクト』は今年度で終了しますが、その種は蒔かれたと思います。そこからどのような芽がでて、育っていくのか、今回のプロジェクトで得た視点を取り入れながら地域の方々と活動を続けていきたいと考えています。

北塩原エリア

2016 Schedule

- 5/13 「磐梯山の森はできたてほやほや」
  「絵画やスケッチを通してみる磐梯山」
  打ち合わせ
- 7/2 「磐梯山の森はできたてほやほや」
  講師、アーティストによるルートの検討会議・事前調査
- 8/25 「磐梯山の森はできたてほやほや」
  アーティストによるルート下見
- 8/26 「磐梯山の森はできたてほやほや」
  アーティストによるルート最終下見
- 8/27 「磐梯山の森はできたてほやほや」
  一日目（科学者の視点で自然観察）
- 8/28 「磐梯山の森はできたてほやほや」
  二日目（アートワークショップ）
- 10/1 「絵画やスケッチを通してみる磐梯山」
  一日目（講演会）
- 10/2 「絵画やスケッチを通してみる磐梯山」
  二日目（バスツアー）

裏磐梯、桧原湖をはじめ、会津有数の自然を誇るエリア。磐梯山噴火記念館、諸橋近代美術館協力のもと、大自然を活かしたワークショップを開催しました。

磐梯山の森はできたてほやほや

プログラム概要

1日目に裏磐梯スキー場登山口から銅沼（あかぬま）、火口壁に至る会津磐梯山登山道周辺を植物学者と火山学者のナビゲーションで散策し、翌2日目は同所にてこもれびの観察、日光写真、スケッチといったさまざまなアートワークショップを行う体験型ジオツアーを主催した。

近現代の北塩原村で起こった最も大きな出来事として1888（明治21）年の磐梯山の大噴火が知られている。旧・桧原村一帯の景観が激変し500名近い方が命を落とした大災害であり、その後の遠藤十次郎氏ら会津の実業家が手掛けた大規模な植樹事業によるスピーディーな森の再生を契機に一大観光地・裏磐梯が誕生した。意外と知られていないが、火口壁の南側では1954（昭和29）年にも降雨による土砂崩れがあり、再生しかけた森の一部は山麓の温泉宿とともに再度埋没している。

のべ2日にわたるツアーを通じて、そうした破壊と再生を繰り返す荒々しい若い森の姿をその目で体験し、“自然災害の凄まじさ”と“災害からの学びを創造的に変換する、人の感性の豊かさ”とを学んだ。

地域への影響など

地域の宝である会津磐梯山の周辺では、磐梯山噴火記念館、磐梯山ジオパーク協議会、裏磐梯エコツーリズム協会など諸団体の方々が、各々の活動テーマ（たとえば噴火記念館であれば火山との共生、防災）に沿って地域住民に対する啓蒙活動（地元小中学校での出前授業など）を個別に行ってきた実績がある。

今回、事務局の働きかけによって磐梯山噴火記念館、村在住地域おこし協力隊員が協働し地元のペンション経営者や自然ガイドの方々のご参加をいただいてジオツアーという形で地域資源への多角的なアプローチができたことは、こういったアートプロジェクトなどに主体的に携わるワーキンググループ形成のきっかけと成り得る“最初の”“大きな”一歩と言えるのではないだろうか。

また、2日目に国立公園エリアで（規制の範囲内で）行ったさまざまなアートワークショップは、地域住民にとっては新鮮な驚きがあった。アートプロジェクトならではのアプローチ、付加価値だと感じた。

Lecturer

阿部 武

1944年生まれ。日本植物学会会員。高校で生物と物理の教師をする。植物生態に興味があり、磐梯山、特に裏磐梯をフィールドに活動している。1888年の噴火から、どのように植生が回復したのか、また五色沼周辺の植林はどのように行われたのかを調査し発表している。磐梯山ジオパーク協議会の専門委員として、ガイド養成などもしている。

Lecturer

佐藤 公

1956年生まれ。磐梯山噴火記念館館長。記念館の勤務後に火山に目覚め、国内だけでなく世界の火山も見て回っている。火山の中でも、特に防災や教育を中心に活動している。火山のすばらしさやおそろしさを、わかりやすく楽しく伝えることが生きがいである。『ブラタモリ』では磐梯山を案内した。日本火山学会会員。

Artist

木村 崇人

1971年生まれ。1998年から「地球と遊ぶ」をテーマに作品を制作。目に見えない地球の力を視覚化し、実際に体で感じる事ができる体験型作品を中心に展開している。ワークショップも国内外で数多く発表。代表作には、木もれ陽をさまざまな形に変える『木もれ陽プロジェクト』、光の特性を利用して作家自身が歩いて感じた森を表現した『森シリーズ』など。『地球と遊ぶプロジェクト』代表。

Data 【参加者】約30人　【関係者延数】10人　【会場】磐梯山噴火記念館 ほか

絵画やスケッチを通してみる磐梯山

プログラム概要

火山であり信仰の山でもあった会津磐梯山は、明治以降多くの画家たちによって描かれてきた。本プログラムでは、どんな作品があってそれぞれどのように描かれているのかを福島県立美術館の増渕鏡子氏を講師にお迎えして、村にある諸橋近代美術館のアートテラスを会場に講義を行った。佐藤公磐梯山噴火記念館館長からも噴火前の磐梯山が描かれた記録や噴火当時の報道記録等について講演いただいた。

翌日には、マイクロバスで磐梯山麓を大回りで一周し、描かれた場所と絵画とを見比べた。

地域への影響など

豊かな自然環境の下で絵画についての青空授業を行うというのは大変贅沢な体験であった。特に福島県内の美術について研究されている専門家から体系的に会津磐梯山をモチーフにした芸術作品をご紹介いただいたことで地域資源に対する知識や理解が格段に深まった。

たとえば、大正期に活躍した画家・小川千甕（せんよう）が喜多方から会津米沢街道を通って桧原周辺まで旅した際に執筆したコミカルな旅日記『二人旅の巻』（1919、喜多方蔵座敷美術館蔵）は村民にとっておなじみの地名、宿などが頻出する興味深い資料である。だが同時に村の中では存在そのものがほとんど知られていない現実もある。本ツアーは地域の宝に関する情報の発信・共有がいかに大切か考えさせる契機ともなった。

Lecturer

増渕 鏡子

1968年生まれ。福島県立美術館学芸員。福島県内の美術について調べている。地域の歴史や自然、生活といった風土からどのように美術が生まれたかを考える。会津では、画家たちを引きつけた若松、喜多方、猪苗代湖、磐梯山などに注目している。近年担当した展覧会は『よみがえるオオカミ』展（2016年）。

Lecturer

佐藤 公

1956年生まれ。磐梯山噴火記念館館長。記念館の勤務後に火山に目覚め、国内だけでなく世界の火山も見て回っている。火山の中でも、特に防災や教育を中心に活動している。火山のすばらしさやおそろしさを、わかりやすく楽しく伝えることが生きがいである。『ブラタモリ』では磐梯山を案内した。日本火山学会会員。

Data 【参加者】約30人　【関係者延数】10人　【会場】諸橋近代美術館アートテラス、磐梯山周辺

磐梯山と森のはこ舟アートプロジェクト

磐梯山噴火記念館館長
佐藤 公

磐梯山地域では、2009年から大地を学ぶジオパークという活動を開始した。そのなかで具体的にフィールドを歩くジオツアーを行ってきた。2016年に『森のはこ舟アートプロジェクト』関係者から協力の要請があった際に、このツアーの手法が使えると思い、ふたつのテーマ『できたてほやほやの森』と『絵画を通したジオツアー』を提案した。

まず『できたて』は、1888年の磐梯山の噴火で、水蒸気爆発により小磐梯という2番目に高かった山が山体崩壊で北側に岩なだれとなって流れ下ったことから考えた。つまり、128年前の噴火で磐梯山の北側の一定の地域の森は、すべて崩れた小磐梯に覆われてしまい、リセット状態になった。現在私たちが目にしている五色沼をはじめとする森は、まだ128歳でしかない。そして、1954年には大雨で磐梯山の北側の斜面が大きく崩れ、現在の裏磐梯スキー場を泥流となって流れ下った。つまり、128歳の森の一部はまだ62歳なのである。遠い昔からある森と128歳の森と62歳の森を比べることで、ツアーに参加した人はどのように感じることができたのだろうか。実際に植物の研究者による解説がなければ、素人にはその違いを理解することは難しかっただろう。私も噴火の話を途中させてもらった。

次に『絵画を通した』では、もともと磐梯山が多くの画家によって描かれてきた山であることから、多くの作品が残されていて、その作品が描かれた場所に立つことで、磐梯山の森がどのように変化してきたのかをジオツアー参加者に伝えた。当日は快晴にめぐまれ、福島県立美術館の増渕学芸員と私でさまざまな絵の紹介をした。噴火以前の江戸時代の絵から1960年代の絵までさまざまな作品を通して、磐梯山という火山、そしてその森を楽しく理解することができたのではないだろうか。

何度も噴火を繰り返し、その山容を変えてきた磐梯山。ふたつのプログラムから、参加者はその森の変遷を感じ取ってくれたと思う。今後も、磐梯山ジオパークのジオツアーのメニューとして、このプログラムを活用していきたいと考えている。

植物研究者の阿部武さんや芸術家の木村崇人さんや県立美術館の増渕鏡子さんたちと共同作業をするなかで、今までのジオツアーがより深まり、今後参加される方には満足度が高まるものができると確信している。

その時々でさまざまな顔を見せてくれる磐梯山とその森をこれからも保全しながら、有効に活用させてもらおう。

2年間の活動を終えて

北塩原エリアスタッフ 赤木進二

船出の翌年、2年目を迎えた本プロジェクトの拡張・発展を企図して事務局である福島県文化スポーツ局文化振興課より北塩原村に事業開催のお声掛けをいただいたと聞いています。

そのため初年度の活動は、まず広く村内に『森のはこ舟アートプロジェクト』を知っていただくことと、次のステップである地域のワーキンググループ形成の機運を醸成することを目的としていました。写真家・林明輝さんの『森を感じる〜写真家・林明輝が訪ねた日本の森〜』を開催し、村の公共施設である生涯学習センター（旧大塩小学校）を会場としたこともあって、村における実働隊は北塩原村教育委員会公民館班でした。また水面下では村の文化施設である諸橋近代美術館、磐梯山噴火記念館の担当諸氏と来年度の活動について何回かのブレインストーミング会議を開きました（私はこのタイミングで本プロジェクトの末席に加えさせていただいております）。

翌2016年度は北塩原村における本格的な始動の年となるべきところでしたが、前年に引き続いての公民館班の参加がかなわず、「地域の宝である会津磐梯山をより深く理解するために多角的なテーマ（植物学、火山学、アートワークショップ、絵画）を設定して複数回のジオツアーをやろうじゃないか」という佐藤公磐梯山噴火記念館館長のご提案にまるごと乗っからせていただく形で、館長と私の実質2名をワーキンググループとして、2回（のべ4日間）のツアー企画を何とか実現させました。

必ずしもそれが全てではないのかもしれませんが、北塩原村が「アーティストが長期にわたって滞在し、地域と協働して、目に見える被造物を現出させる」段階まで至らなかったことに対する力不足を痛感しています。ただ、私個人としては、地域おこし協力隊員として村に移住し、人生で初めてアートプロジェクトに携わるというレアな経験それ自体に充実感があり、また活動を通じてひとつの気付きもありました。元つとめ人の習性なのか、初期にはマンパワー不足を個人的な頑張りで補いたいという気負いが先行していたのですが、ツアーに参加してくださった地元の方々（自然ガイドさんやペンションの経営者さんなど）とコミュニケーションを取っていくなかで「あれ、この人たちを巻き込めば良かったのでは?」と、閃いた瞬間があったのです（ビバ意識改革!）。2016年の北塩原村では私個人の内宇宙でだけ小さな芽が芽吹きました。ですが、こうした小さな芽がたくさん芽吹いて大きな森になることこそ、地域おこしとしてのアートプロジェクトの醍醐味なのでしょうね。

ありがとうございました!

南相馬エリア

2016 Schedule

8月〜9月	「太古の森を感じて」 協力呼びかけ、ヒアリング、リサーチ
10月	「太古の森を感じて」 会場下見、打ち合わせ
2/3	「太古の森を感じて」 最終打ち合わせ
2/4	「太古の森を感じて」

南相馬市は、福島県の沿岸部でも特に東日本大震災の津波被害の大きかったところであると同時に、原発事故で甚大な被害を受けた街です。今なお避難困難区域が残り、除染作業が行われるなど、震災の爪痕が深く残っています。

太古の森を感じて

プログラム概要

南相馬市は化石の宝庫として知られ、世界的な基準となっている化石も発見されている。3000個以上のアンモナイトの化石が発掘されたことは、南相馬の森がかつては海であったことの証左である。これら発見された化石の造形について、化石となった動植物の成長の仕方や化石の形成の過程について専門家から話を聞き、なぜそのような形をとるに至ったのかを知った上で化石の観察・スケッチを行い、そのインスピレーションを形に落とし込む意味でポリマークレイでの造形を行うワークショップを開催した。古生物学と美術の両面から見ることで、それぞれの作品が科学的な観察に基づいたものなのか、創造性の働きによるものなのかを話しながら造形を行い、さまざまな視点で観察することの大切さ・楽しさを子どもから大人まで体験できる素晴らしい機会となった。

地域への影響など

南相馬市は化石の宝庫と言われているが、今回のワークショップの参加者は地元に住んでいながらも、今回のように間近で化石を見て触れることが初めてという方が非常に多かった。また、造形が楽しそうという理由で参加した参加者からも「化石となるような数億年も前の動植物がどのように生きていたのか等、なかなか知る機会のない内容を知ることができ非常に面白かった」といった意見もあった。アートという手法を通すことで、それまで興味の薄かった自分たちの地域の身近な文化を見つめ直す良き機会となったことは、このプログラムのひとつの成果である。それだけではなく、化石の形から得た着想を造形していく過程を参加者全員が楽しみながら進めることで、地元の人たち同士につながりを作る場としても機能するプログラムとなった。

Artist

君 平

1974年生まれ。成安造形大学立体造形クラス卒業、2001年筑波大学大学院修士課程総合造形分野修了。現在、成安造形大学美術領域現代アートコース特別任用教員・准教授。「鉄を通して見えてくるもの」をテーマに美術家として活動。近年は、溶接機とクレヨンを使った平面作品や、自然物をモチーフにした鉄の彫刻作品に取り組んでいる。

Lecturer

竹谷陽二郎

1952年生まれ。東北大学理学部地学科卒業、1981年東北大学大学院 理学研究科博士課程地学専攻修了。現在、福島県立博物館専門員。専門は地質学・古生物学で、特に中生代の放散虫化石（プランクトン）の分布や分類。現在は、相馬地域のジュラ紀の地層や化石を対象に調査・研究している。

Data 【動員延数】25人 【関係者延数】約7人 【会場】南相馬市博物館 【掲載メディア】福島民友、福島民報、読売新聞

博物館によるアートの可能性

南相馬市博物館
二上 文彦

南相馬市博物館として関わらせていただいたワークショップは、化石を題材とした『太古の森を感じて』である。

南相馬市は古生代〜中生代〜新生代というすべての地質時代の化石が産出する化石の宝庫。以前は地元の子どもたちとともに現場に足を運んで、地元の標本を使って地学を学ぶことができる、恵まれた環境にあった。

しかし、2011年の震災にともなう原発事故以降、子どもたちを連れた地学関連の野外学習は、放射線量（化石が多産する市西部が、比較的放射線量が高かった）の関係で自粛され、地学教育普及は停滞するに至ったのである。

そんな中で開催された化石をテーマとしたワークショップでは、今から約1億5000万年前のジュラ紀後期の地層から産出する、シダ・ソテツ等の植物化石やアンモナイトの解説、化石のスケッチ、樹脂粘土によるアンモナイトの造形などが行われた。冒頭の化石の解説は、実物資料をもとにした“実証的”な、博物館としてはある意味王道の手法。その後行われたスケッチ・造形では、化石の専門家が植物やアンモナイトの分類をするために、詳細に観察する形状の特色の違いや、アンモナイトの螺旋構造・隔壁で仕切られた小部屋（気室）といった内部構造の特色がうまく表現されていた。ややもすると口では伝わりにくい場合がある“理論的”な専門的な知識を、スケッチや造形という“実践的”なアート活動を通じて、参加者の子どもたちがわかりやすく“感覚的”に自然に受け入れ、且つ自由に楽しく取り組む姿が印象的であった。

アートは美術館・文化財は博物館、という暗黙に近い線引きがあり、あまり博物館活動でアートを取り上げることがなく、当館も例に漏れず、アートと関わることは皆無であった。しかし今回のワークショップでは、停滞していた地学教育普及が十分でき、加えて、より深み・広がりを持たせることができたと感じた。地域の文化財や自然資料を、アートというフィルターを通すことによって、従来の博物館活動では伝えにくかった部分も、伝えること・イメージしてもらうことが可能であることを実感したのである。

思えば、博物館も美術館も同じmuseumであることに変わりはない。今回ワークショップを通して感じたのは“博物館によるアートの可能性”である。今後はより広く柔軟な視野を持って、museumとしての博物館活動に励んでいきたいと思う。

1973年生まれ。南相馬市博物館学芸員。相馬地方の伝統行事『相馬野馬追』を中心とした地域の歴史を研究し、国内外で野馬追の普及啓蒙活動を行う。震災・原発事故後は、県内のアートプロジェクトにも参画し、おもに南相馬市内でのアーティスト活動のサポートに携わっている。

2年間の活動を終えて

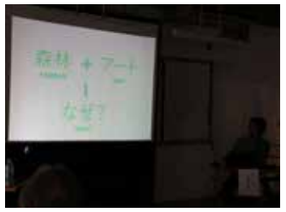
特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク 遠藤和輝

南相馬市でのプログラムは、事務局が主導して2年間にわたってプログラムを開催してきた。初年度は、南相馬市をまずは私たち実行委員会メンバーがよく理解し、南相馬市に合わせた森林文化とアートを融合させたプログラムをどうやって実施していくのかを考える年だった。会津地方とは異なり、山・里・海の連環を持つ土地であり、海の近くにある集落では防風林、防潮林といった会津地方にはない木の文化を持つ土地であった。その特色を活かし、当時南相馬市で起こっていた震災後の植生や自然環境の変化に焦点を当て、自然と人間の共生について考える場としてフォーラムと現地見学会を開催した。県内外を問わず多くの参加者が南相馬市に足を運び、参加者ひとりひとりがしっかりと南相馬市の現状を肌で感じ取ることができるプログラムとなった。参加されたアーティストの方からは、ぜひこの土地で一緒にこれからの風景を考えていきたいとおっしゃっていただき、今回のプログラムを通して南相馬とアーティストとの新しい結びつきができた。さらに、南相馬市博物館の方々やNPO法人浮舟の里の方、小高ワーカーズベースの方ともつながりを作ることができ、今後南相馬市で活動をしていくためのネットワーク構築ができた1年であった。

2年目は、1年目にできたつながりを活かし、地元の方を巻き込む形で、アーティストを交えたアートプログラムを開催することを目的にプログラムをすすめた。1年前からステップアップして、地元の方からのアイデアをアートと融合して具現化することで、南相馬市の方が南相馬市の資源を活用する大切さを知ってもらうことができるプログラムとなった。南相馬市の地域資源のひとつである化石に触れて、よく観察して、色や残っている部分以外の部分を自分なりに創造して太古の森にあった動植物を想像する機会を提供することができた。参加者からは、こういうワークショップであれば、ちょっと難しい化石というテーマであっても、大人も子どももとても楽しんで学ぶことができるという声をいただいた。「こういう活動を自分たちでもやりたいね」という声も聞かれた。

南相馬において、2年をかけて、地域の人が自分たちの地域の資源に気づき、それを活用して、自分事として自分の地域にある文化を発信しようとする、その動きのきっかけを作ることができたことは大きな成果であると考える。

森のはこ舟クロージングフォーラム
『森の鼓動、人の蠢き、アートの力』



プログラム概要

2部構成で行われたフォーラムの第1部は『はこ舟の旅-3年間の活動-』と題し、各活動エリアからの活動報告を行った。開催地の喜多方市、西会津町、三島町、北塩原村、猪苗代町、南相馬市より各地の担当者がパネリストとして発表を行い、どんな目的をもってどのようなプログラムを開催したのか、そしてその活動によりどのような影響があったのか等、3年間の活動を通して見えてきたものについての発表が行われた。

第2部の『かかわりのたねの育て方』ではNPO法人BEPPU PROJECT代表理事の山出淳也氏をゲストに迎え、赤坂憲雄実行委員会委員長とのトークセッションを行った。森のはこ舟が生み育んできたものから派生させ、地域住民とアートがつながるために必要なものは何であるのか、それぞれの観点からお話いただいた。

地域への影響など

クロージングフォーラムには、首都圏在住のさまざまなアートプロジェクトに興味を持つ方や実際に関わっている方、『森のはこ舟アートプロジェクト』のプログラム開催地域出身者の方など多くの方に来場いただいた。第1部では、各地域の現状とこれまでの活動を通しての地域の変化などを共有し、3年間の活動を来場者と一緒に振り返り、今後どのような活動につなげていかなければならないかということをともに考える良い機会となった。第2部では、赤坂実行委員長とゲストの山出氏との対話を通して、地方とアートプロジェクトについて考える機会を提供できた。アートプロジェクトを開催した地域がアーティストからアイデアをもらい、それを地域がどうやって自分事として受け取り、地域のものにしていくのか、その大切さを来場者と共に共有できた非常に有意義な時間であった。来場者からは、『森のはこ舟アートプロジェクト』が3年間行ってきた活動で培ったものを育てていくよう切に訴える声も聴かれた。これまでの活動の成果をしっかりと共有し、未来につながるクロージングフォーラムとなった。

Data 【動員延数】38人　【関係者延数】約21人　【会場】3331 Arts Chiyoda 内アーツカウンシル東京 ROOM302

第1部 「はこ舟の旅 -3年間の活動-」

喜多方エリア 須藤亜貴

会津の伝統的な婚礼の文化を下地に、アーティストが手を加えた棚田劇『森の婚礼』の映像を会場で紹介。集落の休耕田を舞台とした舞台で、集落住民による会津そば口上の披露や、役者による婚礼文化を表現したダンスの場面などが映し出された。住民との関係性の中で偶発的に生まれるアートの面白さに惹かれ、移住者が集まってきた事例などが語られた。

西会津エリア 矢部佳宏

アートと森林文化はなぜ融合しなければいけないか、わかりやすい図を用いて説明した。特に3年目は、2年間の経験を生かしスタッフが主体的に活動、アーティストがそのサポートにまわる形となった。継承が難しくなってきた地域の文化を、町民が自らアートと融合させ、新たに再生させる流れが町に広がっている。

三島エリア 三澤真也

豪雪地帯でアクセスもしづらい三島町だが、狩猟や食糧保存の技術などの山の暮らしの文化が色濃く残っている。過疎高齢化進み、存続が危ぶまれる地域のコミュニティをよい形で存続させるために、アートを手段として使ってきたという。三島町に移住を考える人がいい雰囲気を感じ取ってほしいという説得力を持った言葉に、集まった観客も聞き入っていた。

猪苗代エリア 岡部兼芳

猪苗代湖で約25年前に発見された自然現象“しぶき氷”を軸にしたプログラムの経過の写真が、主に紹介された。積雪の多さもあり町でマイナスに捉えられがちな冬だが、資材を借りに行ったりする中で、活動に関心を持つ住民が増えてきたという。新たな森林文化になり得る“しぶき氷”に、アイディアで挑むアーティストとスタッフの奮闘ぶりが語られた。

北塩原エリア 赤木進二

地域の宝である磐梯山をより深く学ぶツアーを2度行い、その際の写真が紹介された。実働スタッフが少ない北塩原だが、大きく関心を持った村民も多かった。企画を通じ知り得た話をすると、とても盛り上がったことから、もう一歩踏み込み、一緒にやろうと声をかければ共に活動する仲間ができるかもしれないと興奮気味に語られた。

南相馬エリア 遠藤和輝

津波被害と原発事故のふたつに見舞われた南相馬に対し、会津からアートを通じともにやれることはないか探してきた。南相馬の現状に心を寄せる方は多くいるものの、被災地見学という名目での行きづらさもある。アートという入り口をつくり、現地の文化を知りながら、現状の見学もできる企画を実施したことが報告された。

各エリアの報告のあとは、本プロジェクトディレクターの伊藤達矢氏と各エリア登壇者6人によるフリートークが行われた。アートを通じ、過疎高齢化が進む土地に向き合うことは必ずしも前に進めるようなことばかりでなく、集落が閉じ、次の世代につないでいけないといった“寂しさ”を間接的に考えることでもあったという。ここでは会場からの質問も受け、次年度の展望について、地域の“社会包摂”をテーマに新しいアート事業を進めていることが明かされた。

聞き手
伊藤達矢

1975年生まれ。東京藝術大学美術学部特任准教授。アートコミュニティ形成事業『とびらプロジェクト』および、『Museum Start あいうえの』のプロジェクト・マネージャを勤め、社会とアートを結びつける活動に従事している。

第2部 「かかわりのたねの育て方」

山出 淳也 × 赤坂 憲雄

Jun'ya Yamaide
NPO法人BEPPU PROJECT代表理事／アーティスト

Norio Akasaka
「森のはこ舟アートプロジェクト」実行委員会委員長

人の心を耕す、人のつながりを育てる
アートにしかできない役割に目を向ける

赤坂「第1部で若い人たちの話を聞いて、いろんなことを考えていました。“寂しい”という言葉がとても大切なキーワードだと思っています。これからの日本は人口も減っていくわけです。その減少を止めることは、今の社会のあり方から考えてできないと思っています。50年後に訪れる人口8000万人の日本列島、それをどのように迎えるのか、そこに“寂しさ”という言葉が被さるのはどうしようもない。その“寂しさ”を受け止めようとする時に、アートが大きな役割を果たしうると思っています。

山出さんがやっていらした『国東（くにさき）半島芸術祭』の話にも重ね合わせをしたいのですが、以前伺ったとき、まさに寂しさの極地のようなところに連れて行かれました。何十年か前になくなった村の跡をさまよわされたり、半島中から家の廃材を集めている浜辺の処理場を見たり。国東半島だって寂しいですよね。でも、そこから始めるしかないって覚悟を僕は山出さんに感じてきました」

山出「いま赤坂先生がおっしゃった“始めるしかない”って言葉が、僕はすごく大切だと実は思っていて。おっしゃられていた通り“引き受ける覚悟”なんだと思うんですよ。向き合わざるをえないということ。ただ、その現実と向き合っていきながら、自分たちはどう進むのかという時に、大切に考えなきゃいけないことがひとつあるなと思っています。自分たちが、誰かからバトンを渡されて、次に渡さなければいけないということです。芸術祭で、とある地域に作品を設置したことで、いろんな社会問題も起きましたけど、地域の方々含め、それを自分たちはどう引き取り、どう次に渡していくかという、そこのプロセスに入っていくことが重要です。いま、芸術祭が終わって、次をどうするかというところですが、我々はそれをやり続けなくていいんじゃないかと思っています」

赤坂「少し話を戻して、国東や別府の話を、山出さんが大分でやってきたことのエッセンスを教えてください」

山出「僕は『混浴温泉世界』という2009年、12年、15年と開催された芸術祭のプロデューサーでした。そもそも僕は、実はアーティストなんですけど、2003年末にはまだ海外に住んでいました。その時に大分県の別府市のまちづくりの方々の活動の奮闘ぶりが書かれたインターネットの記事を読んだんです。その記事の中には、お客様がひとりでも来れば街歩きにご案内しますから、ぜひお気軽に来てくださいと書かれていて。その“ひとりでも”という言葉がものすごくひっかかりました。団体観光客向けの街でひとりに対するサービスを、なんでこの人たちが一生懸命やってるんだろうっていうのが不思議で。それで海外から市役所に問い合わせをしたら、行政の方が一生懸命やっているということを僕に伝えてくれるんだけども、それがすごく熱を帯びた言葉でした。心が動いたんですよね。僕は大分市出身だし、とにかくこの人たちに会いたいって思いました。子どもの頃に見てきた別府は今どうなってるんだろうと。別府を僕の知り合いのアーティストたちに見せたいし、彼らも絶対に面白いって言ってくれるに違いないし、そうなると別府からインスピレーションを得て作品を創りたいと思うんじゃないかとか。そういうことを考え出したらすごくわくわくして。それで日本に帰ろうと思ったんです。つまり、僕は誰からも頼まれてないのに、こういうことを始めたんですよね」

赤坂「国東半島芸術祭の体験はどういう風に考えていらっしゃいますか？」

山出「アントニー・ゴームリーさんという方が、本人を型どった彫刻を創ってくれたんですよ。『ANOTHER TIME XX』という鉄の彫刻作品なんですけど、地域の方は作品を“ゴームリーさん”と呼んでいます（笑）。山の上に設置した鉄の裸像が150年から200年くらいかけて砂鉄になり、山へ還っていくという作品です。実は、この作品の設置に関して地元のお寺関係と摩擦がありました（※作品を設置した場所は国東半島における修験道の順路であるため）。大げさなことではなく、街を歩けばみんなゴームリーさんの話をしていましたし、今もまだ解決していません」

赤坂「まだ議論が終わってないんですね。でも、大地のとても大切な場所に置きましたね」

山出「設置がむちゃくちゃ大変だったんですよ。なんせ630キロの鉄のかたまりですから。それで一時、設置は難しいとなった時に、俺ならできるっていう人が現れて。地元のしいたけ農家のおじさんです。しいたけ農家さんって、ケーブルカーでクヌギの木を山から運び下ろしたりすることがあるんですよ。そんな風に地域の方の技術や知恵で設置できたことが、とてもうれしかったですね」

赤坂「しいたけ栽培っていうのも山師の一種ですよね。彼らにしかない技術っていうのが、ちゃんと継承されていて良かったですね。国東半島はまさにしいたけを特産とする土地で、その土地に継承されている技術が、そういう形でつながったということですよね。僕、“ゴームリーさん”はとっても象徴的な気がします。アートって、どこかで妥協なき戦いをせざるを得ない瞬間があって、その時はガチンガチンにぶつかるんですよ。だから、地域の人たちが喜んでくれるものだけをやれるわけじゃない。こっそりとんでもないことやってしまうような、そういう暴力性みたいなものもアートにはありますよね」

山出「アートってなんでしょうね。僕もアーティストって名乗ったり、美術館に作品を買ってもらったりしていたにも関わらず、アートって一言で語れなかったんですよ。それがすごくショックで、毎日ずっといろんな人たちと話しながら考え続けて。今、僕らにとってアートの価値ということで言えば、今までのものの見方や考え方だけではないあり方について、気付かせてくれる触媒だと思ってます。そこに新しい価値が生まれると思うんですよ。これは時として、今までの我々の常識をどんどん拡張しなければ、理解できないこともあったりするかもしれません。そういう時にいろんな価値観がぶつかることはあると思います。それは恐れることではなくて、すごく大切にしないといけないことですね」

赤坂「福島で行なわれている『はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト』での話なのですが、本郷毅史くんという若い写真家がいます。彼は震災前から、山奥の川の源流をテーマに撮っていて、震災後は福島の源流も撮影しています。その写真の下に、2014年なんて数字があった途端にその写真の意味は変わってくるんですよ。誰も議論しないから気が付いてないけど、僕はものすごく暴力的な写真だっていう風に思います。源流っていうのは大地から水が湧き出している、清らかで汚れなき場所だったんですよ。でもその源流すら、実は福島では汚れているのかもしれない。そういう誰も触れたくない現実っていうのを、2009年と2014年っていう数字だけでね。何も説明しないけど、語ってるんですよね。アートってそれをやれてしまう。それを剥き出しの政治的な議論の場に持ち込まずに、そっと置いて、ある意味では知らん顔している。でも気付かれるんですよ、やがて。そういうことってあるのかなと思いますね」

山出「作品だけでなく、いろんな活動の中で、そういうことがたくさん出てくると思いますね。実は、今ちょうど来年の大分県の国民文化祭の全体のプロデュースをしてるんですが、文化という言葉をとても大切に感じています。そもそも文化って言葉は外来語なんです。ラテン語で“コレーレ”。もともとは耕すという意味です。そして“コレーレ”から派生して生まれた言葉がいくつかあって、例えば“cultivate”。これは耕すという言葉です。あとは“agriculture”、農業という言葉がありますよね。“culture”は文化。つまり、農業というのは土を耕すという意味であり、我々が文化と呼んでいるこれは、人の心を耕すという意味だったいうことに気がついたんですよ。土を耕し人の心を耕す、その両方が大事だと。それは恐らくね、風土と関係していくと思います」

赤坂「ここまで地域の芸術祭が風土にこだわってるのは、山出さんのところが極北だと思います。種を撒いてもそこにしか育たない植物がある、というようなところにとてもこだわっていますよね。そして、“耕す”という言葉はいいですね。柳田國男という民俗学者は『風景を植える』と言いましたけど、風景は作るんじゃなくて、種を植えて、みんなが水をやって育てていくものだ、時間がかかるんだっていう言い方をしていた。誰かひとりの突出した人がやれることじゃないんですね。今日のタイトル『かかわりのたねの育て方』は、ひとつの新しい文化的な価値観を作るといったアートの役割とは別にもうひとつ、人と人との関わりや、地域のさまざまなつながりを、種をまいて育てていこう、それもアートにしかできないことなんじゃないかという思いを込めたテーマだと思いました。そして、自分の暮らしている場所にきちんと足をつけて、隣とも連携をしながら、なにか大きなことやる時には皆がわーっと集まってというようなことが、会津では自然と始まっています。僕はそういう意味で、会津が、未来に向けてさまざまな可能性が耕されていく場所になり得ると感じています」

山出 淳也 Jun'ya Yamaide

1970年生まれ。アーティストとして参加した主な展覧会として『台北ビエンナーレ』、『GIFT OF HOPE』など多数。地域や多様な団体との連携による国際展開催を目指して、2005年にBEPPU PROJECTを立ち上げ現在に至る。『別府現代芸術フェスティバル『混浴温泉世界』』総合プロデューサー、『国東半島芸術祭』総合ディレクターなどを歴任。現在、文化庁第14期文化政策部会文化審議会委員。

赤坂 憲雄 Norio Akasaka

1953年生まれ。民俗学者、学習院大学教授、福島県立博物館長。『森のはこ舟アートプロジェクト』実行委員会委員長。東北学を提唱し、1999年に『東北学』を創刊。2011年以降は、東北でのフィールドワークに基づき、東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故により東北が直面にしている問題について講演や著作活動も行っている。

随 想

ばらばらな人たちが、ともに文化の土壌を耕した、3年

アーツカウンシル東京
佐藤 李青

「あ、俺、今年の（コア）会議に全部出席しているわ」「それって、おそらく、達矢さんくらいですよ。というか、達矢さんの予定に合わせて、集まっているということもありますが」「まぁ、よくあんなにばらばらな人たちが集まってやってきたよね、それが大きな成果だよ」

プロジェクトの終了が決まり、翌年度のプランを議論したコア会議の帰り道、東北新幹線の車中でディレクターの伊藤達矢さんと、そんな会話をした。“コア会議”とは、『森のはこ舟アートプロジェクト』の各エリアのメンバーが集まり、月に1回、福島県立博物館の会議室で進捗共有や議論をする場のことだ。誰が命名したのか記憶はないが、いつの間にか定例化していた。

西会津、喜多方、三島、猪苗代、北塩原。5つの市町村から集まった“コア”メンバーは、いわゆる、その地域の“代表”ではない。エリアコーディネーターを中心にプログラムを運営する当事者たちだ。それゆえ、会議の議題は、常に具体的で切実だった。アーティストや地域との向き合い方から契約の仕方に予算の使い方まで、長いときには、ひとつの話題で数時間も議論したことがあった。

地図上では隣のエリアも、移動しようと思えば、車で平均40〜50分はかかってしまう。広大な山や川にエリアは隔てられ、冬はあっという間に雪に閉ざされる。道路は、その地形を縫うように走り、人々の暮らしは鬱蒼とした森に抱かれるように営まれている。ここでは、たとえ同じ“会津”というアイデンティティを共有するとしても、当然のように各エリアが背負う“文化”は違う。『森のはこ舟アートプロジェクト』は、この“ばらばら”な人たちが集まる、いくつものテーブルを用意した。

テーブルの準備は、震災以前からの福島県立博物館の働きや『奥会津アートガーデン』の構想によって始まっていた。そして震災を機に立ち上がった『Art Support Tohoku-Tokyo』（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）は、そこに接続することから、西会津、喜多方、三島で『週末アートスクール』を展開した。2012年度からは福島県も合流し、その枠組みは『福島藝術計画×Art Support Tohoku-Tokyo』へと発展する。『森のはこ舟アートプロジェクト』は、この延長線上で、2013年度に事業を開始した。2年目には猪苗代、北塩原とコア会議のテーブルを囲むメンバーが増え、遠く離れた南相馬でもプログラムの実施を試みた。

同じく2年目の2015年度にはNPO法人ふくしまアートネットワーク（FAN）が立ち上がった。FANはプロジェクトの事務局として、どこかのエリアに属するのではなく、その間をつなぐ、すなわち全体のテーブルをつくる役割を担った。それは会津、もしくは福島という広域を対象としてきた事業の成果であり、各エリアの活動が充実してきた結果でもあった。

各エリアのメンバーにとって“アート”は厄介なものだったに違いない。外からやってくるアーティストに伴走し、慣れないアートのプロジェクトに取り組み、そもそもアートという共通言語がない人々とともに作業を行う。メンバーの誰もがプロジェクトの最前線に立ちながら、その土地に暮らす住民でもあった。その困難は想像に難くない。だが、年を重ねることで、エリア側がアートを使いこなすようになっていった。それは西会津を中心とした“パートナーシッププログラム”の継続と拡大に象徴的だろう。

とにかく、一緒に何かをやってみる。そこから得られた実感は何よりも大きい。その連鎖はエリアで関わる人々や、ときには他のエリアへ“飛び火”していった。アートプロジェクトというテーブルで交わされるのは、言葉だけではない。

2015年度に三島では、アーティストのEAT&ART TAROさんと『食のはこ舟』に取り組んだ。三島町間方地区に伝わる“トチ餅”づくりをTAROさんとエリアコーディネーターの三澤真也さんがトチの実の採集から餅づくりまで全ての工程を教わり、その内容を紙芝居で残した。地域の失われゆく“文化”を継承しようとする試みだった。

そのトチ餅を食べるという日にTAROさんから、次のような話を聞いた。トチ餅づくりを経験してみると、いくつか明らかに必要のないように思える工程があったのだという。それでも全ての工程が継承されてきた。それは工程を変えてしまうと、トチ餅づくりが失敗するおそれがあったからではないか。つまり、三島町は豪雪地帯で食料の環境が決して良いともいえなかった、この土地で、トチ餅作りの失敗は生きるための食を失うことを意味する。だから、確実にトチ餅をつくれる、この工程が続いてきたのではないか。そうTAROさんは推察していた。

土地の文化には、そこに暮らした人々の生の記憶が込められている。それは当然のことのように日常に浸透しているからこそ、文化となる。だが、それは時を経て、生のあり方が変化することで、いつしか消えてしまう。“アート”は、文化を生きたものとして、他者が触れることができるものとする、ひとつの術（すべ）となりうるのだろう。

『森のはこ舟アートプロジェクト』は、アーティストを水先案内人として、それぞれの土地の文化に向き合おうとしてきた。そこには、この地域が迎える、喪失への危機感があった。その“寂しさ”と向き合うことであった。だが、その現実に真摯に向き合う実践の先に現れたのは、どれもが朗らかで、生のよろこびを参加者と分かちもつような現場だった。3年間で2回も婚礼（『幻のレストラン』と棚田劇『森の婚礼』）が行われたのだから。そして、その視線は未来に向いていた。

「あぁ、このテーブルについている人たちは、ここで新しい文化をつくろうとしているんだなぁ」

あるとき、コア会議に出席していて、そう感じたことがあった。文化が生きる時間は、人が生きる時間よりも圧倒的に長い。それは自然がもつ時間の感覚に近いのかもしれない。『森のはこ舟アートプロジェクト』は終わる。だが、3年をかけて同じテーブルで、ともに文化を耕してきた人々が、この土地で生き続けるかぎり、その“もぞもぞ”とした蠢きは続くことだろう。

コア会議後の忘年会にて実行委員会のメンバーとともに。（2016年12月）

1982年生まれ。アーツカウンシル東京プログラムオフィサー。岩手県、宮城県、福島県を対象とした東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業（Art Support Tohoku-Tokyo）を担当。都内事業は、東京アートポイント計画、Tokyo Art Research Lab『思考と技術と対話の学校』と研究・開発プログラムに携わる。共著に『6年目の風景をきく―東北に生きる人々と重ねた月日』（アーツカウンシル東京、2016年）。

事務局

森のはこ舟アートプロジェクト 実行委員会事務局長

遠藤 和輝

Kazuki Endo

喜多方、三島、西会津。この3つの地域のネットワークを育みながら、全体のプロジェクトマネジメントを担ったのが、事務局の遠藤和輝さん。事務局長としての立場からプロジェクトを語って頂きました。

●このインタビューは「森のはこ舟アートプロジェクト2015報告書」に掲載されたものを再録しています。

事務局の役割とは、森を見渡すこと

―各地のワーキンググループのサポート役ということで、『縁の下の力持ち』の役割に徹した1年だったかと思います。今年1年取り組んできたことからお話頂けますか?

「私たち事務局の役割は、プロジェクト全体の把握や広報、それから報告書のとりまとめなど。あくまでサポート側に回っています。昨年度までは、喜多方WGが兼務で事務局を担っていましたが、今年は地元にできたNPO法人にその役割を委託しています。それが、私の所属する、特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク、通称FAN(ファン)です。この法人は、昨年5月に、アートプロジェクトを活用した地域振興、地域活性化を行う団体のネットワーク構築や支援を目的として作られた団体です。実際にアート事業を実施するWGを根元から支える、そんな担いをした1年だと感じています。

それに加え、事務局単体で実施した事業もありました。例えば、2014年度の事業報告も兼ねたキックオフフォーラム。ディレクター伊藤達矢さんにお話し頂いてコンセプトを共有しつつ、各エリアのコーディネーターからこれまで実施してきたプログラムの報告と各エリアの今年の抱負を共有いただきました。さらに、今年は東日本大震災で甚大な被害を受け、今なお避難区域の残る南相馬市でフォーラムと現地見学会を実施しました。南相馬市は2019年には植樹祭も予定され、復興・再興に向けて必死に頑張っている地域です。震災・津波・原発と様々な環境変化があり、現在の状況をしっかりと受け止め、そしてこれからの自然環境を考える、そんな機会となりました。特に現地見学会は環境の変化を間近で見られる非常によい機会であったと思います」

―南相馬ですか。一見すると会津とは距離的にも離れているし「森」というイメージがありませんが、実際にはどのような感じでしたか?

「南相馬の西部に豊かな阿武隈の山並みがあり、その麓には里山、そして里山から海に注ぐ川、海があります。海といっても、砂浜や磯場があったり干潟があったりして、とても多様なんですね。今回は、震災後に群生しはじめた絶滅危惧種のミズアオイなどを見て回りました。実はこの群生地は、津波の後に生まれたところでした。津波は町を破壊しましたが、自然環境にとっては、もともとあった状態に戻ったというほうが正しいかもしれません。自然と人の関わりがよく見える場所でもあるんです。ツアーバスには、南相馬市博物館学芸員の稲葉修さんに添乗いただきました。自然環境だけでなく、そこに文化や歴史的な背景を織り交ぜた話をしていただいたことで、より“森”について深く知ることにつながりました。稲葉さんは、震災前から南相馬に住んでいる方でもありましたので、生々しい現地の声も伝えることができたと思います。森のはこ舟アートプロジェクトは、スタート時点では確かに会津から始まっていますが、福島県全体を見ると、会津の里山と南相馬の海が豊かな“森”によってつながっていく姿をイメージできると思いますし、震災と原発事故を経験した福島県の森のあり方というものが見えて来るのではないかと思います」

文化とアートの力で、新しい寄り合いをつくる

―森のはこ舟アートプロジェクトが始まり、これまで2年に渡り各地でプロジェクトが行われてきたことで、色々な副次的効果も生まれてきていると思います。遠藤さんが強く感じることはありますか?

「森のはこ舟アートプロジェクトの各エリアの動きを見ていて、人が集まる場所・機会が地域に増えたなと感じます。一つのアートプログラムの実施にあたって、地域の住民や周辺市町村の方など多くの人を巻き込んで、何度も何度も集まって、テーマとなる地域資源を深く掘り下げる作業をする。その中で新しいコミュニティができて、地域間のネットワークであったり、個対個のネットワークであったりを構築する一助ともなっているなとすごく感じます。一見わかりにくい、こういう『もぞもぞ』は、地域にとって必要な活動であると思っています。例えば、2014年に三島で行われた『森の祈り×サイノカミ』の事業は、その後三島町とアーティストが直に地域に繋がって、予算もついて事業が引き継がれました。森のはこ舟がきっかけになって町が巻き込まれた形です。こうして後に残るもの、三島の三澤さんの言葉を借りれば“飛び火”を作れているのは、大きな成果だと思っています」

―確かに“飛び火”という言葉は印象的で、森のはこ舟の効果を表す言葉だと思います。遠藤さん自身、この“飛び火”を作っていくには何が大事だと思いますか?

「重要なのは、やはり元々その地にある歴史と文化をしっかりと知ることと、それをどうにか面白くしようとする“もぞもぞ”ですかね。それがあれば世代を超えて、地域を越えてたくさんのネットワークができると思います。都市部では忘れ去られつつある文化や知恵、歴史が森には息づいていて、若者がそれを学びに森に行き、そこでコミュニケーションが生まれて、いつの間にかアートプロジェクトが立上がってくるんです。アートを介することで、地域や世代の区切りとかそういう人間が勝手に作り出した壁を取り払ってくれて、人と人との対話と合意のなかでプロジェクトが進んでいるというのを、森のはこ舟の活動の中では何度も見てきました。実際に三島と西会津の合同プロジェクトでは、両地域の町長が揃って参加し、普段は直接話せないような方ともコミュニケーションが取れる機会となりました。つまり、アートを介することで、既存のコミュニティとは異なる繋がりが生まれるんです。森のはこ舟を通じて、こういう新しい寄り合いが生まれていくんじゃないかと期待していますし、この動きを会津だけでなく県内に派生させていきたいと考えています」

活動拠点「蒲生館」
住所:福島県耶麻郡西会津町野沢字原町乙2207-1
TEL:090-5357-3381(遠藤)

遠藤 和輝 Kazuki Endo

1986年、福島県生まれ。
NPO法人ふくしまアートネットワーク事務局長。公立大学法人会津大学大学院博士前期課程コンピュータ理工学研究科にて修士号を取得。2013年、TAKLAM (タクラム) というイベント制作・企画・運営会社を設立。会津若松を中心に音楽やアート、ものづくりに関わり、新しいものを生み出す“つくる人”を応援する事業を展開している。

喜多方

エリアコーディネーター

五十嵐 恵太

Keita Igarashi

今年度から喜多方エリアのコーディネーターを務める五十嵐恵太さん。五十嵐さんが関わりを深くした背景には、喜多方ならではの「町と森の関わり」があるようです。

●このインタビューは「森のはこ舟アートプロジェクト2015報告書」に掲載されたものを再録しています。

町から森へ向かう独特のスピード感

―喜多方は町のイメージが強いですが、どのように森との接点を作ったのでしょうか。

「喜多方は『蔵の町』とも言われるように、全域が『森』と関わりの深い地域とは言えません。ですから、町が森とどう付き合っていくのか、町から森にどのように導線を作っていくのかをプロジェクトでは重視しました。今年は、市内の中心部から少し離れた楚々木(そそぎ)集落と、高郷町と2カ所でプロジェクトを行いましたが、普段の生活では森と接点の少ない方に声をかけて森に集まってもらったり、リサーチの報告を通じて森のことに興味を持ってもらえるように計画をしていきました。町で生活をしている方にとっては、普段の生活の中で森に関心を持つことはほとんどないでしょうが、『アート』が森への入り口になってくれて、森へ接続する回路になってくれたように思います。森へ通うことで森の見方が変わり、付き合い方も変わる。それがじわじわと感じられるようになってきました」

―具体的にはどのようなプロジェクトが行われたのですか?

「『楚々木樂舎』では、楚々木地区で使われなくなっていた廃校を利用した『場づくり』を行い、そこを会場にして夏、秋、冬と季節を変えて3回のワークショップを実施しました。廃校が子ども達の声であふれ、集落の方がとても喜んでくださったことが印象的です。調査活動や勉強会などがオープンな企画になっていることも特徴です。『高郷プロジェクト』では、高郷町が広範囲なこともあってフォーカスの仕方がまた違います。1年目のリサーチを基に、アーティストが地域のボートレースなど市民行事に参加しながら、そこに暮らす人たちへのフォーカスを進めてきました。地域へ入っていくスピードがゆっくりなのが特徴かもしれません。どちらのプロジェクトとも、いきなり来て何かを作るということではないですね。地域の人足や、行事のお手伝いを重ねて、集落の方との距離感を近づけていったりと、すごく丁寧なプロセスを経てプロジェクトが進んでいます」

アートをきっかけに 森の見方や関わり方を変えていく

―五十嵐さんは、今年からエリアコーディネーターに就かれていますが、プロジェクトとの関わり方を変えた背景には、どのような事情があったのでしょうか?

「活動の主体となっている『NPOまちづくり喜多方』では、ここ数年、若者の受け入れに力を入れてきました。地域の様々なプロジェクトを任せて実戦の経験を積んでもらい、社会に出る一歩手前の学びの場となっていたんです。森のはこ舟の喜多方での活動が始まった時も、NPOの若者が主体となり試行錯誤しながらプロジェクトを進めていましたが、経験の少ない若者中心だと、プロジェクトをこなすことだけで精一杯になってしまっていました。そんな様子を見ながら、もっとこんな風にしたらいいのにな、と思うところもあって、私自身がアートと関わってきた経験を基に、今年からコーディネーターをやらせてもらうことになりました。100%の成果を目指すのではなく、120%を目指す。考えをもって進めていけば、若者達の力も充分に発揮されます。そして、アートプロジェクトではアーティストが帰った後に残されたものを、地域の人たちに引き継いでいくことが大切だと私は考えています」

―五十嵐さんが考えているのはプロジェクトの持続性ということでしょうか。持続性を生んでいくためには、プロジェクトには何が必要だと考えていますか?

「アートの面白さって『モノの見方』だと思うんですね。目の前にあるものに対して、1つの答えにこだわらず別の見方を模索するのはアーティストと呼ばれる人たちの得意とするところです。地元の人にとっては当たり前に見えるものが、見方を変えると実は新しかったり、他にない特別なものだったり、そういうことが実際に活動を通して発見されてきています。例えば、森のはこ舟と関わることで、森に対する見方が変わったり、森との接し方が変わったり、そうした人が一人でも増えていくこと、それがまさに成果だと思います。そして、アートを通した体験を、特に子ども達に経験して欲しいと思っています。全国的に学校のなかで美術の時間が減らされている中、こういったアートプロジェクトは地方でアートやアーティストと関わることができるとても貴重な場とも言えます。アートプロジェクトを通して人が育って土壌を作っていくというイメージでしょうか。町である喜多方には、そんなことも求められていると思います。成果を数値化することは難しいけれど、森の見方やアートに対する考え方がじわじわと変化していくようなプロジェクトが仕掛けられたらいいですね」

活動拠点「食堂つきとおひさま」
住所:福島県喜多方市寺町南5006
TEL:0241-23-5188

五十嵐 恵太 Keita Igarashi

1977年、山口県生まれ。
武蔵野美術大学油絵学科2001年卒業。個展、グループ展を多数開催。油彩、アクリル画を中心に幅広い作品を制作。2011年に喜多方に移住し、1年間かけて古民家を改装した「食堂つきとおひさま」を夫婦で営む。教員として高校で美術を教えたり、デザイナーとしてWEB制作に携わった経験もあり、その経験を活かして喜多方でアートを楽しむ場を創造していきたいと考えている。喜多方アートスクール『空のある教室』主宰。

西会津

西会津エリアコーディネーター

矢部 佳宏

Yoshihiro Yabe

西会津エリアコーディネーターである矢部佳宏さん。西会津国際芸術村を拠点に様々な取り組みを続けています。ご専門であるランドスケープデザインの視点を交え、西会津の魅力やマネジメントについて伺いました。

●このインタビューは「森のはこ舟アートプロジェクト2015報告書」に掲載されたものを再録しています。

変化のきっかけをつくるということ

―これまで2年間コーディネーターを務めるなかで気づかされた西会津の魅力はどんなところですか?

「実は、西会津というのは、会津の中で一番標高の低い町でありながら、標高2000mクラスの飯豊連峰がすぐそばにある。つまり高低差に多様性がある土地です。さらに、切り立った谷や盆地の広がりが同居するなど地形の多様性もあります。さらに思想的な多様性もあるんですよ。西会津は新潟経由で会津地区ではもっとも早く京文化が入ってきたということもあり、かつては研幾堂という学塾から多くの偉人達が輩出されました。確かに『これだ!』という観光資源が少ないという声もありますけど、裏を返せば総合性が高いからこそ、一つ一つの要素にスポットが当たっていないのではないかと思うのです。なので、そこにアートの視点が加わることで、町の魅力や多様な文化的背景に光があたり、面白い取り組みができるはずだと思っています。」

―森のはこ舟をスタートさせて、大きく変わったところはありますか?

「2014年を経て、アーティストとどのように関わればよいか、どう関わることが地域にとってアートの役割が生きてくるのか、町の人たちが少しずつ理解してくれたような気がしますね。心がけてきたのは、アーティストと住民の両方に働きかけるということ。いくらアーティストが『こんなところが面白いよ』ということを提示しても、そもそも住民が何とかしようと思っていなければ、プロジェクトも進みませんし、まちづくりにも繋がりません。一方、アーティストに対しても、町のことや町の未来に必要なこと、コーディネーターとしての私の考えを伝えなければ、1人よがりなプロジェクトになってしまいます。例えば、2014年から開催している『草木をまとって山のかみさま』では、2015年からは私たちがアーティストからワークショップを引き継ぎ、参加者に八百万の神様になってもらうというアレンジも加えました。地域住民の意見をしっかりと汲み取りつつ、アートプロジェクトそのものをデザインしていくのも、コーディネーターの大事な仕事だと思っています。2016年は、神社のある町並みをアートで盛り上げようというアイデアが住民の側から生まれてきました。」

変化のきっかけをつくるということ

―住民側からアイデアが寄せられるというのはすごいですね。今年は具体的にどんな動きにつながりそうですか?

「『草木をまとって山のかみさま』では、地元の区長さんから『今年は大山祇神社の 参道までの町並みを、子供達の絵等を使って装飾してみたい』というアイデアが寄せられたので、参道の雰囲気を出すために日除け幕に絵を描くワークショップを提案しています。神社とアートの結びつきが1つの新しいまちづくりになってきているんですね。このほかにも、集落の活性化に関わる方から『アーティストを紹介して欲しい』なんてことを聞かれるようにもなりました。最初は、アーティストやコーディネーターからの提案を、よくわからずただ受け取っていた住民が、今や自分たちでプロジェクトにアートを活用していく段階に入っています。これは本当に大きな成果だと思いますよ。まちづくりというのは、アートにせよ何にせよ、最初は外部の力が必要でも、いずれ地域の方々が主体になっていかなければなりません。」

―そのような変化は、やはり森のはこ舟特有の「時間軸」があると思います。1つのプロジェクトに時間をかけることについて、矢部さんの考えを教えて下さい。

「私の専門であるランドスケープデザインは、木を植えて30年後に自分の思い描いてきた風景が出てくるという世界なので、そもそも成果を急ぎません。文化もそうだと思います。川に石を一つ、ドボンと投入したからといってすぐに流れが変わるわけじゃありません。石をいくつもいくつも投げ入れ続けることで、少しずつ水の流れが変わって、それによって土が浸食されたり、深さが変わったりして、そこでようやく新しい流れが出てくるわけです。そのように、日常生活のなかでの一つ一つの行為を見直すきっかけとしてアートの視点が入っていかなければならないと考えています。例えば私たちが活動拠点にしている西会津国際芸術村も同じです。子どもの頃にこの場所がなかった人にとっては、その存在が違和感として捉えられてしまうかもしれませんが、子どもの頃から芸術村が当たり前にある世代にとっては、アートの視点で日常を見ることがより近いところに感じられるようになると思います。だから、私はそのくらいの時間軸で森のはこ舟を捉えるようにしています。木が育つのも、川の流れが変わるのも、子どもたちが育って地域が変わっていくのも、1年や2年ではどうにもなりませんから。そうやって、じっくりと、少しずつ、森のことや自然のことについての価値観が変化したり、付き合いかたが変わって行くことでしか、新しい時代は切り開かれないのではないかと思っています。その意味では、私たちは、そのきっかけを作り続けているのにすぎないのかもしれません。」

活動拠点「西会津国際芸術村」
住所:福島県耶麻郡西会津町新郷大字笹川上ノ原道上5752
TEL:0241-47-3200

矢部 佳宏 Yoshihiro Yabe

1978年、福島県生まれ。
西会津国際芸術村コーディネーター(株式会社西会津町振興公社所属)。NPO法人西会津国際芸術村理事、studio CLYNE(カナダ、ウィニペグ)共同主宰。森のはこ舟アートプロジェクト西会津エリアコーディネーターを務めるほか、西会津町歴史文化基本構想策定委員。株式会社上山良子ランドスケープデザイン研究所、フリーランス(studio CLYNE)、NITA DESIGN GROUP、Tengtou Landscape International Creative Center を経て、現職。

三島

三島エリアコーディネーター

三澤 真也

Shinya Misawa

森のはこ舟アートプロジェクトの3エリアのうち、人口1600人あまりと町の規模が最も小さい三島町。古来の知恵が息づく森の町にアートが生み出した「飛び火」について、三澤さんに話を伺いました。

●このインタビューは「森のはこ舟アートプロジェクト2015報告書」に掲載されたものを再録しています。

アートの通じない町で、アーティストを受け入れる

―まずは三澤さんのプロジェクトへの関わりから教えて下さい。

「三島に移り住んだのが5年くらい前で、森のはこ舟には初年度からエリアコーディネーターとして関わっています。何しろアートが通じないような土地ですから、地域とアーティストの接点づくりからです。初年度からプロジェクト型で5人を受け入れたわけですが、正直実際には5×2くらいの仕事量。アーティストも住民も『ここで何やるの?』って感じでしたからね。とにかく最初は人と会ってリサーチして、それぞれの集落を巡って話を聞いて、何となくこととここでこんなことができないかな、という形が少しずつ見えてくる、そんなイメージですね。大事なのは、上から押しつけないということ。地域の人たちが何をやりたいのかという意向を汲み取って、その上で『アートを通してお手伝いできることはありませんか?』という立ち位置から、皆さんと接していくことを心がけてきました。出てきたものがアートなのか何なのか、正直よくわからなくなることもありますが、今のところアートと言っていいものができあがったと思っています」

―三島は、周囲の環境から言っても、まさに会津の森の文化が色濃く残るところですね。三澤さんは、どんなところに三島の魅力を感じますか?

「三島について語るときに思い出す風景があるんです。5年くらい前に初めてやってきたときに、たまたま町の方とすれ違ったんですが、その方が笠と蓑をかぶっていたんです。こんな地域がまだ日本にあったのかと、あの時は本当に驚きました。博物館の方に聞くと、笠や蓑を今も実用しているのは奥会津くらいしかないんだそうです。つまり、歴史の中で培われた森の生活文化や自給自足の暮らし、森に対する眼差しが今も息づいているということです。会津の中でも豪雪地帯ですし、その豊かさというのは、もしかしたら厳しさと裏腹のものなのかもしれません」

―今年度印象的だったプログラムを教えて下さい。

次に「飛び火」するかを見なければ、成否は判断できない

「印象的だったのは、西会津と共同で行った『幻のレストラン』という企画ですね。EAT & ART TARO さんという方のプロジェクトです。彼は食をテーマにした作品を作るアーティストなんですけど、一番おいしくおにぎりを食べられるシチュエーションを作ろうといって、そのためだけに週末運動会を開いちゃうような作家です。つまりそこに生まれる“場”そのものを作品とするんですね。場といっても会場作成で終わりではない。そこに集まってくる人がどうその空間を楽しみ、最後にどのような場になったのかを見届けないと、そのプロジェクトが本当にアートになっているのかわからないんです。その意味で、『幻のレストラン』が終わった後の打ち上げはとても印象的でした。住民の中に固まっていたものが氷解して、本当に仲良くなれた気がしましたね。その雰囲気ができてくると『次に何かやろう』という気持ちになれる。私は、そういう『次に飛び火するかどうか』が、プロジェクトの成果だと思います。だから打ち上げになってみないとわからないということなんです」

―その飛び火によって生まれた熱がネットワークを作り出す原動力になっているのかもしれませんね。今年、三島にはどんなネットワークが新たに生まれましたか?

「ライトアートのアーティストで、筑波大学の先生もやられている逢坂卓郎さんとのプロジェクトでは、1年目から筑波大の先生や学生さんが来てくれました。さらに今年は、自動車メーカーの日産の方が入ってきてくれて、日産の電気自動車を借りることができ、その電気自動車のバッテリーに会津若松の風力発電のエネルギーを蓄電して、集落の周りの杉林をライトアップするという企画ができました。学生、学校、そして自治体に企業と、様々なネットワークが生まれてきています。三島町の人口はこのまま何も策を講じなければ、30年後には500人くらいになってしまうんじゃないかという試算があるんですね。つまり、自力で何とかするという段階ではない。周りの力を借りながらやらなければならない。新しいコミュニティの姿を描いていかないと存続できないということです。会津では震災後から自然エネルギーの動きが活発になっていますが、三島町だからこそできる『自然エネルギーに拠った暮らし』というものも、おぼろげですが見え始めているような気がします。アートを突破口として、ネットワークやライフスタイル、コミュニティにまで可能性を広げていきたいと思っています」

三澤 真也 Shinya Misawa

1979年、長野県生まれ。
長野県立諏訪清陵高校卒、武蔵野美術大学造形表現学部映像学科卒。大学卒業後20代は絵画、映像、パフォーマンスを中心にアート活動を展開。国内外でパフォーマンスアートフェスティバルに多数参加。アート活動の傍ら2年ほど国内外を放浪。その後飛騨高山にある「森林たくみ塾」にて2年間の木工修行を経て、三島町生活工芸館の木工指導員として勤務。現在同三島町にあるNPOわくわく奥会津.COM に勤務しながら、復興アートプロジェクト『森のはこ舟アートプロジェクト』に三島町エリアコーディネーターとして参加。

活動拠点「ゲストハウス　ソコカシコ」
住所：福島県大沼郡三島町桑原荒屋敷1302
TEL:090-3345-3043

猪苗代

猪苗代エリアコーディネーター

岡部 兼芳

Takayoshi Okabe

2015年から「森のはこ舟」メンバーとなった猪苗代エリアで、コーディネーターを務めた岡部さん。活動をとおして、考えを新たにしたというアートの持つ意義について伺いました。

町の素材を活かすアート

— 猪苗代エリアでは2015年から「森のはこ舟」が始まりました。参画にあたって、どのようなことをお考えになりましたか?

「ちょうど『はじまりの美術館』がオープンして1年ちょっとの頃でした。何せ美術館の運営自体も試行錯誤だったので、きちんと責任を果たしていけるか、アーティストに不便をかけはしないか、不安だったのを覚えています。ただ、地域密着の美術館として町の人と何か一緒にやりたいという思いはあったので、それをどう実現していけるかを考えるいい機会をいただけたと思います」

— そもそも猪苗代は福島県でも指折りの観光地ですね。岡部さんは郡山市のご出身とのことですが、この町で美術館を運営していて気付いたことはありますか?

「まず最初に感じたのは、人の流れは多いけれども、地元の人の満足感は低いのではということです。企画もお客さんも外からやってきて、猪苗代をフィールドにイベントをして散っていくだけ。恵まれてはいるけれど、自分たちで何かを作り上げる実感や、満足感を得る機会が少ないという話を若い方からよく聞きます。ではどうすれば意欲を持つ地域の人たちが手ごたえを得られるのか。今回の『森の氷本』には、“しぶき氷”や“雪吊り”の技術など、町の素材がたくさん取り入れられています。そこには、ひとつのアート作品に町の文化がこれだけ活かされていて、自分たちの町はこんなにも素晴らしいのだということを味わうきっかけになって欲しいという思いもありました」

— 『はじまりの美術館』は、一般的な美術とは一線を画する作品を取り扱うことが多いですね。その活動と、「森のはこ舟」のようなアートプロジェクトには、何か共通するものを感じられたのではないでしょうか。

「そうですね。『はじまりの美術館』では、アートというものをいかに敷居を低く、面白いと思ってもらえるか大切にしています。いわば、この美術館自体がアートを問いかける場所なのです。イメージ化されているアートではなく、本当はどうなのか自分で読み解いてみる、そんな時間を提供することができたらと考えています。

私たちの美術館で取り扱う障害を持ってる方の作品っていろいろな呼び方をするんですよ。“アール・ブリュット”や“アウトサイダーアート”、“エイブルアート”とも言われたこともあります。彼らの作品を見ていると何か名前をつけずにはいられないような、とてもキラキラした力を感じます。きっと昔の人もそういう思いで“アート”という言葉を使ったのではないかなと思うんです。特別な人の特別なものではない、日頃自分の周りにあるもの。そういうものに気付くきっかけを感じることができたら、それはもう形や表現方法がどうあれアートなんだなと思うのです。『森のはこ舟』が標榜してきた森林文化をテーマにした活動も、そもそも土地に根付いていたものや習慣にしてきたことを、視点を変えて見つめ直すということを実践してきましたよね。そういう意味では、私たちの活動ととても近しい部分があったと思います」

ハードルを低く、翻訳し、伝えていくこと

— 今年度で『森のはこ舟』は終了となりますが、今後に活かすべきヒントがあったとしたらそれはどんなことでしたか。

「“アート”という言葉を使うことで、ハードルが上がるのなら他の言い方でもいいのかなと思いました。要は自分たちが実感を持って、“アート”と言われているものとはこういうことなのだと翻訳し、伝えていくことが大切なのだなと。『森の氷本』を作り上げる中で、まず自分たちが楽しむこと、それを次の世代に残すこと、それらをまるっと“アート”と言っていいんだと思えた瞬間がありました。そのあたりを、もっとたくさんの方に感じてほしいし、そのためにどう道筋をつけていけるかが必要なのだと思います。

近年、“社会包摂”※というキーワードが各所で語られるようになりました。でも本来の社会包摂とは、社会が人を包み込むのではなく、ひとりひとりが意識することで、その人の考え方や生き方が整っていくこと、つまり、その人の構えのことだと思うんです。住んでいる人が社会を形づくっていく、それが本当の“社会包摂”なのではと考えています」

※社会包摂…社会的に孤立や困難を抱えている人々に対して社会参加の機会を開き、社会的課題の緩和や解決に取り組む継続的活動のこと。

活動拠点「はじまりの美術館」
住所:福島県耶麻郡猪苗代町新町4873
TEL:0242-62-3454

岡部 兼芳 Takayoshi Okabe

1974年、福島県生まれ。
社会福祉法人安積愛育園マネージャー、はじまりの美術館館長。福祉作業所の支援員・中学校教員を経て、社会福祉法人安積愛育園に入職。知的に障がいを持つ利用者の表現活動をサポートする『ウーニコ』に携わる。2014年より現職。「人の表現が持つ力」「人のつながりから生まれる豊かさ」を大切に考え、誰もが集える場所として開設された美術館から、寛容で想像的な社会の実現を目指す。

北塩原

北塩原エリアスタッフ

赤木 進二

Shinji Akagi

猪苗代と同じく、2015年からの新規参入となった北塩原エリア。地域おこし協力隊の赤木さんは新たな試みで得たものがあった一方で、さまざまな課題に気付くきっかけともなったと語ります。

一大観光地としての森をどう活かすか

— 北塩原エリアは2015年から『森のはこ舟』の一員となりましたが、赤木さんはどのような経緯で活動に参加されるようになったのでしょうか。

「私は2015年の6月に村の地域おこし協力隊員第1号として北塩原に移住していました。はじめは村内の空き家調査や学校支援ボランティアなどの活動が主だったのですが、『森のはこ舟』が同年の10月に村での第1弾プログラムとして開催した写真展『森を感じる〜写真家・林明輝が訪ねた日本の森〜』を見に行く機会があって、そこで初めて『森のはこ舟』と出会うことになりました。その時に、担当していた公民館の方から“興味があったら赤木くんもどう？”という話をもらって、晴れてワーキンググループの一員となったわけです。それまでにも、アートによる地域おこしの潮流を小耳に挟んではいたので、実際に自分が活動に参加できるというのは単純に面白そうだったし、何か新しいことができるのではという期待もありました」

— 北塩原エリアでは、今年度、『磐梯山の森は、できたてほやほや』と『絵画やスケッチを通してみる磐梯山』のふたつのプログラムを開催しました。実際の活動はいかがでしたか？

「1年目の写真展は『森のはこ舟』を広く知ってもらうための企画だったように思います。それを踏まえ、今年度開催したプログラムは、森に接してもらうことが目標だったように思います。企画は村にあるふたつの文化施設、諸橋近代美術館、磐梯山噴火記念館の担当者を交えて話し合いをする中で、見えてきました。特に噴火記念館の佐藤館長が長年温めていたアイデアが活かされています。結果的にイベントは好評で、今後もこういうことをやっていきたいという声も上がったのはうれしかったです。

でも一方で、難しさも痛感しました。北塩原の森は大部分が国立公園になっており、里山のような生活の場ではなくむしろ保護の対象なのです。三島町や西会津町のような生活圏にある森とは勝手が違っていることを思い知らされました。だからこそ『磐梯山の森はできたてほやほや』の時、そういった制約を踏まえアーティストの木村崇人さんが提案された木漏れ日の観察や日光写真などのワークショップは、とても素敵なプログラムだと感じました。このあたりから発想を膨らませて、たとえば“踏み入れてはならない森”なんてテーマで、より突き詰めたアプローチもできるかもしれません」

— 確かに、北塩原の森は少し特殊な立ち位置の森とも言えますね。アートプロジェクトに参加したことで地域を見る目に変わった点はありましたか？

「地域おこしの立場にいると、もとから住んでいる人よりもその土地のことを意識的に学ぶ機会が多いのかもしれません。その意味で、掘り起こしたい文化がある、まだまだ埋もれている資源の存在を一層感じましたね。実は北塩原は標高によって文化圏が変わるのです。例えば北山地区はまだ農村らしさがあり、その一段上の大塩地区は温泉街、もっと標高の高い桧原地区は木地師の里でした。そのようなエリアの違いによる文化の違いなんていう面白みも、アートプロジェクトを通して伝えられたらいいですよね。発想の元となる要素は豊富にあるんです。協力隊の活動だけでは思いつかないようなアピール方法、伝え方のヒントをもらえたことは大きかったと思っています」

— 今後、地域でアートプロジェクトを続けていくとしたら、どんなことが重要だと考えますか？

「とても残念だったなと思うのは、興味を持ってくれる人、この活動を楽しんでくれる人がいたのに、プログラムを遂行することに必死で、結果自分たちだけでやってしまったことです。その方々に声がけして、グループを形成するという考えに至れなかった。他のエリアの活動を見ていると単純に羨ましいんです（笑）。自分がこの『森のはこ舟』に巻き込まれたように、他の誰かを巻き込んで行っても良かったんですよね。アートプロジェクトを進めるということは人の流れを作ること。その大切さをより強く感じました。今後は例えば今回ツアーに参加してくださった地元の方たちと、アイデアを出し合いながら、何か新しい活動ができたらと考えています。ここで学んだこと、知りえた知識を、活かしていくことができたらその時が『森のはこ舟』の北塩原での成果なのではないでしょうか」

人を巻き込むこと、人の流れを作ること

赤木 進二 Shinji Akagi

1969年、東京都生まれ。
東北大学文学部史学科卒（専攻は考古学）大学卒業後はUターンして都内出版社に勤務。主に宣伝部に所属し、新聞広告や中吊り広告などの出版広告全般のディレクションに携わる。2011年退職。以降は田舎暮らし・東北回帰への願望を日々募らせる。県中通りでの林業就業者講習（2012）など幾多の個人的トライアルを経て、2015年6月より北塩原村地域おこし協力隊員（北塩原村役場・総務企画課企画室所属）として会津に移住を果たす。

活動拠点「磐梯山噴火記念館」
福島県耶麻郡北塩原村大字桧原字剣ヶ峯1093-36
TEL：0241-32-2888

活動拠点「諸橋近代美術館」　＊写真は「諸橋近代美術館アートテラス」
福島県耶麻郡北塩原村大字桧原字剣ヶ峯1093
TEL：0241-37-1088

＊2016年度北塩原村エリアプログラムは、上記の2館と、北塩原村地域おこし協力隊、事務局が協働して実施しました。

伊藤 達矢 × 遠藤 和輝 × 川延 安直

Tatsuya Ito
ディレクター

Kazuki Endo
実行委員会事務局長

Yasunao Kawanobe
コーディネーター

プロジェクトの中心メンバーが語る
森のはこ舟の理念とこれからの展望

プロジェクトの中心メンバーが語る森のはこ舟の理念と、これからの展望ネットワークの扇の要 福島県立博物館とNPO「FAN」2年目を終えた森のはこ舟アートプロジェクト。まずはここで、中心メンバー3人にお集まり頂き、今年の成果や再確認しておくべき理念などについて語ってもらいました。はこ舟の船体を支える「龍骨」のカタチを探ります。

●この鼎談は「森のはこ舟アートプロジェクト2015報告書」に掲載されたものを再録しています。

―まずは2015年度の事業を振り返って、それぞれのお立場から得られた収穫などについてお話ください。

伊藤「2015年は、森のはこ舟アートプロジェクトが去年までやってきたことを、だいぶ整理できた一年になったという気がしています。一番大きな成果は、NPO法人FAN(ふくしまアートネットワーク)という組織の動きを作れたことです。このNPOは、森のはこ舟アートプロジェクトが開催される三つの地域のワーキンググループ(以下「WG」)のネットワーク構築と、全体のプロジェクトマネジメントを担う組織です。これまでは、どちらかというと各地のWGが個別でプロジェクトを管理していましたが、今年はFANができたおかげで、各地の組織の間にネットワークが生まれています」

川延「そうですね。興味深いのは、FANの担い手も、各地のWGもアート専門の人員ばかりではないということです。プロジェクト発足当初から、森のはこ舟の事業に関わっている西会津のNPO法人ローカルフレンズも、もともとふるさと宅配便などを作っていたNPOですし、三島も喜多方もまちづくりのNPOです。そういう役割の違う組織を繋ぎ合わせる接着剤としての力がアートにあるということだと、改めて感じています」

伊藤「これまでは、それぞれの地域で個別にやってきたけれども、森のはこ舟が立ち上げられてから、お互いの活動に気づき出して、何か一緒にやりましょうと、ある種の繋がりが生まれたんですね。その繋がりが生まれたということが1年目くらいまでの成果だったと思います。今年はさらにそれを深めて、小さな町同士のネットワークを作っていくことをイメージしてきました。福島や郡山など大きな都市部で決定されたことを放射状に各地に伝えていくあり方ではなく、小さな町同士が隣同士で繋がっていくような地域社会ですね。それを作っていくには、各地のWGが動きやすくなるようなマネジメント組織が必要でした。それでFANが構想されたというわけです。白羽の矢が立ったのが、ここにいる遠藤さんです」

遠藤「いつの間にか事務局を任されてましたね(笑)。ぼくはもともとはイベント企画の会社を立ち上げて音楽イベントなどをやっていたので、アート関係者ではありません。だから最初は、本業とは違う環境で勉強させてもらいたい、くらいの考えだったんです。でも、実際に関わってみてアートの見方が変わりました。最初は作品を展示することばかりイメージしていたのですが、食についてのワークショップや、地域の歴史や文化を知るためのトークイベントなど、企画のレンジがとても広い。続けていくうちにアートの面白さに気づかされました」

伊藤「NPOを作ろうという話になったとき、どこかの地域のWGが事務局をやるという選択肢は考えませんでした。そうではなく、実行部隊とは違った団体が事務局をやりつつ、ネットワーク構築のための動きを作らなければならないと考えていたんですね。そうでなければ、どこか1つが仕切ることになり、各地の特性を活かしきれないと思ったからです。もともとアート関係者ではなかった遠藤さんが、こうして事務局長を務めているんですから、アートには本当に接着剤としての力があるんだと思います」

遠藤「実際、若松でも色々な団体が繋がって行われる事業はたくさんあります。でも、どーんと大きくやって予算を使うだけ使ったら終わり、というようなものが多い印象です。でも、森のはこ舟は、まずそれぞれの地域がやりたいことやって、その後に連携が生まれていく感じなんですね。連携のための連携ではない。それぞれの地域がまず主体としてあるわけです。FANの運営も、それぞれの地域の活動を邪魔しないことを重視しました」

伊藤「ネットワークが生まれた背景には、もちろん、ここに福島県立博物館があるということが重要です。扇をイメージするとよくわかると思います。風を生み出すのは扇の端のほうだけれど、要がしっかりとしていなければ強い風は生まれません。それと同じで、博物館やFANが要になり、会津地区という扇全体を動かして風が生まれたというイメージですね。やはり博物館の存在感はとても大きいと思います」

森のはこ舟「以前」に、作られていた素地

―震災後に県内各地で様々なアートプロジェクトが開催されてきましたが、これだけ広範囲にネットワークが生まれているのは、会津の特異性だと思います。やはりその中心には博物館があると思いますが、改めて博物館の位置づけ、役割などについてお話ください。

川延「なぜここに博物館があるのかといえば、会津地区の歴史的な層が厚いということがまずあるでしょう。その厚みは、やはりアートプロジェクトにも浸透していきます。美術だけではなく、農産物、道具、伝統工芸、あるいは無形の生活の知恵など、あらゆる地域資源が眠っています。その奥会津の地域資源を活用できないかということで、『奥会津アートガーデン』[※1]という企画をやることになっていました。会津若松ではもう1つ、2010年に第1回が開催された『会津・漆の芸術祭』[※2]という企画もあり、その2つで、会津全域をカバーする文化事業にしようという開催計画だったんです。しかし、アートガーデン開催の直前に震災が起きてしまいました」

伊藤「そこで生まれたのが『週末アートスクール』[※3]でしたね。漆の芸術祭で繋がっていた芸術家たちとの関係が生きました。浜通りや中通りの子どもたちに会津の自然に触れてもらう機会をつくろうというものでしたが、その場所が、まさに今、森のはこ舟の開催場所にもなっている三島と西会津、喜多方だったんです。この企画があったからこそ、森のはこ舟の素地ができたんだと思います」

川延「アーティストとの関係は、実はそれ以前の2008年くらいから始まっていました。『岡本

※1
奥会津アートガーデン
2011年に開催が予定されていたアートプロジェクト。会津地方の中山間部(三島町、昭和村、南会津町、柳津町ほか)での展開を見込んでいたが、東日本大震災により中止に。

※2
会津・漆の芸術祭
福島県立博物館が主体となり、2010年から3年間にわたって開催。会津の漆文化をさまざまな側面から捉え直し、歴史の深さ、文化の豊かさそして街の魅力を伝えることを目的にスタートし、漆職人、漆芸作家ばかりでなく多数の現代アーティストも参加した。

※3
週末アートスクール
2011年11月～2012年3月の間に、喜多方市、西会津町、三島町で実施したアートプログラム。東日本大震災で被災した方々を主な対象に、会津の豊かな自然の中でアーティストとともにクリエイティブな体験をしてもらおうという目的で企画された。Art Support Tohoku-Tokyoの一環。
2012年度2013年度は、福島藝術計画×Art Support Tohoku-Tokyoの一環として開催。

伊藤 達矢

太郎の博物館』という企画がきっかけです。その時に初めて、我々は「生もの」という言い方をしますが、作家さんたちに博物館を使ってもらおうと考えて、館内の色んなところに作品を置いてもらったり、パフォーマンスしてもらうことにしました。そのときには、伊藤さんにも大変お世話になりました」

伊藤「そうでしたね。『週末アートスクール』は、当時の『東京文化発信プロジェクト室』、現在は『アーツカウンシル東京』※4と名前が変わっていますが、そこが被災三県を支援しようと『ART SUPPORT TOHOKUTOKYO』※5という事業をやることになり、福島でも事業展開しようとしたんですね。そこで受け皿になったのが福島県立博物館でした。2008年から取り組んできたことが、地域のネットワークが生まれるまでになっている。これこそ森のはこ舟の成果の1つだと思います」

川延「そこで重要だったのが、行政と行政ではなく、地域のNPOに信頼を置いて任せると言うスタンスだと思います。予算だけ頂いて博物館でやることもできたけれど、そうではないやり方をとったわけです。最初にその事業の管理をお願いしたのが、西会津の地域おこしのNPOだったということです」

伊藤「繰り返しになりますが、森のはこ舟の担い手となっているNPOは、アートの関係者ではないんですね。むしろ『アートって何?』って人たちだった。そこにアーティストが入っていくことで、地域の人間が『アートってこういうことかもしれない』と気づいていく。その流れが、西会津、喜多方、三島のWGに成長していったんです。それができたのは、やはり地域の中での精神的な拠点があったからこそだと思います。単に文化事業をやるということだけでは地域活動は生まれてきません。博物館という文化施設の役割を地域に拡張することができる、あるいは役割を社会装置として機能させられる学芸員がいたことが、やはり大きな鍵だったような気がします。川延さん、そして小林めぐみさんという2人の学芸員の存在は、プロジェクトの素地を作る上でも、本当に重要なものだったと思います」

もぞもぞと焚き火をつくる

—最近では、大地の芸術祭や、瀬戸内国際芸術祭など、大型アートプロジェクトが各地で開催されています。森のはこ舟も「地域」にフォーカスされているという意味では共通していますが、企画の立て方や進め方そのものがまったく違いますね。どのようなコンセプトで企画が立てられているのでしょう。

伊藤「さっき遠藤くんが、イベントについて語ってくれていた話にも共通するのですが、森のはこ舟の作り方というのは、大きなイベントを1発やって終わり、ということはやってないんですね。この期間中、地域を色々見て回れるというようなフェス的アートプロジェクトでもありません。どこかで何かがもぞもぞと動いている『もぞもぞアートプロジェクト』なんです」

『岡本太郎の博物館』福島県立博物館2008年

遠藤「たしかに(笑)。ただひたすらずーっともぞもぞしてますもんね」

伊藤「例えば、キャンプファイアみたいに大きな火を眺めようという企画だと、大きな火が主役になります。そして、その火に対してみんな同じような感情を込めていく。つまり画一的なんですね。でも森のはこ舟は小さな焚き火をいくつも作って、それぞれの小さな火をみんなで囲んでいくんです。フォトジェニックなキャンプファイアと違って、焚き火をカメラで撮影しても火はあまり映りません。それでも、それを囲んでいる人たちや交わされる言葉、時間を大事にしていくようなプログラムをやってきました」

川延 安直

遠藤「確かに、キャンプファイアだと、近くの人の顔が見えても、火の向こう側にいる人の顔は見えませんよね。でも焚き火なら、そこにいるみんなに声が届く。確かに森のはこ舟のプロジェクトは、作品を作るんだか、食を楽しむ企画なんだか、それが果たして芸術なのかすらよくわからないんです。でも、常に何かしらもぞもぞと動いている。その動いてる状態というのが大事なのかもしれませんね」

伊藤「焚き火は、個々人の多様性を許容するための火であって、多様な人たちの考えを画一的にするための炎じゃないんです。同じように、森のはこ舟でやっていきたい事業というのは、大きなお祭りをして画一的な結論に導くことではなく、『もぞもぞ』を作っていくことで多様性を担保していくということなんですね。そういう振る舞い自体が、森の文化に通ずるようなところがあるんじゃないかと思っています」

川延「森って、昔からそこにあるものですよね。森の暮らしもまた、遠くから運んでくるのではなく、そこにあるものを使います。それで充分豊かな暮らしができるんです。実はそれが最高の豊かさなんだと思います。他から買わなくていいわけですから。豊かさが目の前にある。そしてそこに多様な命が育まれ、人はその多様性の恵みを享受しながら、文化を培ってきました。森のはこ舟も同じで、そこに暮らす人たちが、アーティストの力を借りながら、そこにあるものに気づき、その価値を再確認していくということです。ですから当然、時間はかかるし、大きなプロジェクトは生まれにくいかもしれません」

伊藤「森のはこ舟は、様々なそうした関わりを大切にしているプロジェクトだと思います。例えば、演劇って、まずはそこに演者がいて、それを見る鑑賞者がいて、劇が進行する時間の軸がある。これに対して、美術館などで作品を見るという場合は、演者がいるわけではないし、時間軸は見る人に委ねられています。でも森のはこ舟は、この中間にいるのではないかと思うことがあるんです。見る側見られる側の境もあいまいで、誰が演者かわからない。アーティストかもしれないし、住民かもしれない。つまり演者と観客の境目すら曖昧なんですね。会期も設定されてないし、作ってるのか、展示してるのかすらファジーなんです。そういう状態に作っていくために、会期を設定して観覧マップを作って展示を巡ってもらうという展覧会スタイルにはしませんでした。1つひとつのプログラムを小さく開いていくことを通年を通して続けていくことで、アーティストと地域の人たちの関係性を変えていくんです」

川延「よくわかります。一方で、多様性が認められているからといって、何をやっても許されるというわけではありませんよね。『アート』の取り組みですから、作品としてのクオリティをどう担保するのかということは、常に考えていかなければなりません。確かに地元の人たちとのやりとりは、その場所を初めて訪れるようなアーティストにとっては難しい問題でもありますが、やりやすいほうに進んでしまってはいけない」

伊藤「そうですね。ぼくは、半分以上はアーティストを信じるということだと思っています。信じるというか、表現が難しいんですが、信じられる関係を作るということですかね。アーティストの力が発揮できるような環境を作ることが何より重要だと思うんです。どんなに優秀なアーティストに来てもらったとしても、初めての土地で丸投げでは力を発揮することはできないはずです。で

※4
アーツカウンシル東京
東京における芸術文化創造のさらなる促進や東京の魅力向上を図ることを目的として、公益財団法人東京都歴史文化財団の中に発足。助成事業をはじめ、さまざまな文化政策に関わる。

※5
Art Support Tohoku-Tokyo
東京都が芸術文化を活用した被災地支援事業として実施しているアート事業。地域のコミュニティや現地の団体と協働して数々のプログラムを展開。福島県では「福島藝術計画×Art Support Tohoku-Tokyo」として福島県、東京都、アーツカウンシル東京の共催というかたちをとっており、「森のはこ舟アートプロジェクト」もこの一環で開催されている。

遠藤 和輝

すから、いかに作品を作るかではなく、いかに関係をつくるか。ここを重視しないと、プロジェクトを進めることが難しくなってしまいます」

遠藤「その部分では、エリアコーディネーターの皆さんにはとても慎重に動いてもらっていると思います。作家によっては性格も作風も違いますし、『どこまでが作品なのか』も異なります。その意味では、コーディネーターが動かなければならない局面もありますから、地域の人たちとアーティストの距離感だけでなく、アーティストとWGの距離感もとても大事です。近づきすぎてもいけないし、遠すぎてもいけない」

伊藤「つまり、アーティストと地域の人たちの関係性を変えるということに繋がってきますよね。これまでの既存のアートプロジェクトと決定的に違うのはそこだと思います。1つひとつのプログラムを小さく開くことを通年で続けていくことで、アーティストと地域の人たちの関係性が変わり、それを通じて地域の見え方が変わってくる。そしてその『見え方が変わる』ということが、何よりの成果なんだと思うんですね」

川延「そこで大事なのは、これまでの既存の価値基準で成果を判断してはいけないということですよね。新しい関係性を作っていくわけですから、そこには『動員数』などの数の論理を持ち込むわけにはいかない。むしろ、新しい価値判断の軸を作るところから始めなければならないかもしれません」

伊藤「そうですね。集客が必ずしもすべての評価指標ではないということをはっきりさせたうえで、評価指標そのものを更新させていきたいという思いは強くあります。成果を、どれだけ大きな活動が生まれたかではなく、どれだけ深い体験や考え方が育まれたのかに移していく。これは数字では見えないから説明しにくいのだけれども、説明責任を果たすためだけに文化事業を設計してしまうと、そこで失われてしまう本来の成果があるんじゃないか。そのことを、復興支援の企画だからこそ大事にしていこうと思っています」

森のはこ舟の価値を、言葉にしていく

―2016年は事業3年目になります。どのような展望を描いているのでしょうか、それぞれの立場から取り組んでいきたいことなどをお話し下さい。

遠藤「今までは『アートをやるよ』というと、地元の人から抵抗があるというか、異物を受け入れるような感じがありました。ところが、人口減少と高齢化が進んでいる西会津でも、最近ではまったく抵抗がなくなってきていますし、逆にアートを通じて地域のことを知ることができて面白い、という声が大きくなってきました。じわじわ、もぞもぞと、それぞれの地域のコーディネーターが動き続けています。その動きを、今年はしっかり発信していきたいと思っています。私たちは、NPOとして一歩引いたところから、つなぎ役、発信役を担うことができると思うんです」

『会津・漆の芸術祭2012』くいぞめ椀プロジェクト

川延「そういうノウハウを、私たちも博物館として広げていきたいですね。それに、新しい人たちにも面白さを知って欲しいと思っています。そこで伝えていきたいのは『もてなし』です。地域とアーティストを行き来するような事業を経験すると、もてなしの達人になれると思うんですよ。『サービス』といったものではなく、どれだけ自分の持っているものを相手が必要としているかたちで提供できるか。それが本来の『もてなし』なんだと思います」

遠藤「そうですね。確かにアーティストと地元の住民との間に入るというのは、とても繊細な対応が求められますし、マネジメントを通じて得られた経験はとても大きいと思います」

川延「もてなしのスキルは、どこに行っても使えるものですし、どこでも必要とされるものでもあると思います。日本中でそういう人たちを作っていく。どこで災害があるかわかりませんから。アーティストと地域のミスマッチを防ぐという意味でも、もてなしの精神を持った人たちを育てていかなければなりません」

伊藤「そういう『もてなし』の精神みたいなものって、すごく大事なんだけれど、うまくやれている地域に行くと、みんな『何も意識してない』なんて言うんですね。でも自然にそんなことができるはずがない。きっと本能でやっているのかもしれないけれど、実は、そこには何らかのロジックがあって、色々なものが積み重なって、奇跡的な空間ができているわけです。それらをしっかりと言葉に残していく。この報告書もそうだと思います。言葉として残していく必要があると思うんです。プログラムだけを挙げて『こんなことをやりました』と言うのではなく、奇跡的な空間を成り立たせている本当の要素を価値化していかなければなりません。
森のはこ舟という事業で、どんな価値が生まれたのか、その小さな価値そのものを紡いで、拾い上げていく。まさにその『価値化』に取り組んでいく2016年にしたいと思っています」

遠藤「例えば、西会津などは、森のはこ舟以降、様々な取り組みが行われるようになっています。廃校を利用した『西会津国際芸術村』などの利用も活発になってきました。地域おこし協力隊の応募が相次いでいて、たった1人の募集に対して十数人もが応募してきているそうです。小さいもぞもぞがいろいろなフックとなって、町のなかに生まれてきているんですね。西会津といえば、福島県内でもトップクラスで高齢化が進んでいる町です。そんな町で生まれているものを、都市部の指標で比べられるはずがありませんよね」

伊藤「改めて思うのは、森のはこ舟で生まれた『もぞもぞ』は、数十億円かけられるような取り組みと、文化プロジェクトとしての重要性はまったく変わらないんだということです。『FAN』というNPOがあったことで連携できたり、まったく違った価値観の業種や世代が繋がっていけるんだということを、しっかり可視化させていきたいですね。そうして可視化させながらプログラムを組んでいくことで、『もぞもぞ』自体の価値も高まっていくと思います」

伊藤 達矢 Tatsuya Ito

1975年、福島県生まれ。2006年 東京藝術大学大学院芸術学美術教育専攻 修了（博士号取得）。現在、東京藝術大学美術学部 特任助教。東京都美術館と東京藝術大学の連携によるアートコミュニティ形成事業『とびらプロジェクト』および、上野公園内に集積する9つの文化施設を連携させたラーニングデザインプロジェクト『Museum Start あいうえの』では、プロジェクト・マネージャーを務め、社会とアートを結びつける活動に従事する。

遠藤 和輝 Kazuki Endo

1986年、福島県生まれ。NPO法人ふくしまアートネットワーク事務局長。公立大学法人会津大学大学院博士前期課程コンピュータ理工学研究科にて修士号を取得。2013 年、TAKLAM（タクラム）というイベント制作・企画・運営会社を設立。会津若松を中心に音楽やアート、ものづくりに関わり、新しいものを生み出す“つくる人”を応援する事業を展開している。

川延 安直 Yasunao Kawanobe

1961年、神奈川県生まれ。筑波大学大学院芸術学修士修了。岡山県立美術館を経て、現在福島県立博物館専門学芸員。『福島芸術計画×ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO』や『はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト』など、福島県内のさまざまな文化発信活動に携わっている。

赤坂 憲雄 × 小林 めぐみ

Norio Akasaka
「森のはこ舟アートプロジェクト」実行委員会委員長

Megumi Kobayashi
コーディネーター

なぜ、博物館でアートなのか？
博物館だからこそできた取り組みとは？

「森のはこ舟アートプロジェクト」の成り立ちと福島県立博物館の関係性について、森のはこ舟実行委員会委員長で福島県立博物館長の赤坂憲雄さんとコーディネーターで主任学芸員の小林めぐみさんに訊きました。

●この対談は「森のはこ舟アートプロジェクト2015報告書」に掲載されたものを再録しています。

“開かれた博物館”であるために、想いの受け皿となるために

―「森のはこ舟アートプロジェクト」にとって福島県立博物館の果たす役割はとても大きいものに感じます。そもそもなぜ博物館でアートに取り組む動きが出てきたのか、そのあたりからお話いただけますでしょうか。

小林「福島県立博物館では2007年ごろから“開かれた博物館” を目指してさまざまな試みをしてきました。たとえば詩人の和合亮一さんに展示物の前で朗読パフォーマンスをしていただいたり、エントランスホールで現代美術家のやなぎみわさんに能を上演していただいたり。展示室や収蔵資料だけにとどまらないあり方を模索し始めたのがこの頃です。それが結実したのが2009年の企画展『岡本太郎の博物館・はじめる視点』展。常設展示と相対する形でアーティストに作品を制作・展示してもらいました。作家の目線が入ることで、博物館がもともと持ってるものを違った角度から見せてくれたように思います」

赤坂「私が福島県立博物館長に就任したのが2003年。その頃、博物館はある種の停滞感の中にあったと言ってもいいと思います。とってもいい博物館なんですよ。でも時間が経つ中で、置き去りにされつつあった。それを打開するための試行錯誤のひとつが、現代アートを博物館の中に導き入れることでした。そもそもヨーロッパなどでは美術館も博物館も等しく“ミュージアム” と呼びますよね。しかし、日本では明治以降制度的に分断されてきてしまったんです。その垣根を少しでも低くして、博物館と美術館がもう一度出会う場を作りたいというのが私の中にはありました。その中で開催した『岡本太郎の博物館・はじめる視点』展は、もう批判の渦だったよね(笑)。土偶の脇に現代アーティストの作品がなんのことわりもなしに置いてあるんだもの。観に来た人たちの中にも混乱した人がいたと思います。でも僕の目から見ると通常展示って開館以来ずっと一緒で、見飽きている部分もあった。それがアーティストの作品が置かれることによって場にカオスが導入され、緊張感が生まれる。いろんな問いかけや対話が始まる。革新的で発見に満ちたおもしろい試みだったように思います」

小林「ここでたくさんの現代アートの作家と出会ったことが、のちの展開にとっても大きな財産になっていきました」

―その後、2010年から福島県立博物館主導による初めての芸術祭『会津・漆の芸術祭』が行われましたね。しかし、翌年には東日本大震災と東京電力福島第一原発の事故。博物館としても、アートを扱う意味においても大きな出来事であったかと思います。

小林「そうですね。震災があって人と自然がどう関わったらいいか、もう一度考えなくてはと思うようになりました。単に文化の掘り起こしや地域が元気になるというコンセプトの立て方では、私自身もう事業ができなかったんです。ありがたいことに、作家さんたちからも『何か手伝えることはありませんか?』という申し出をたくさんいただきました。そこで、博物館は彼らの受け皿になって、その想いを少しでも多く福島や東北に伝えていこうと、漆の芸術祭の続行を決め、同時に東京都の文化による復興支援事業との連携が生まれ、週末アートスクールなど文化面から福島の復興に繋がる活動を始めたのです」

赤坂「アーティストたちは混沌としている福島で何ができるか、そしてアートって何だろうという問いを抱えて、止むに止まれぬ気持ちで参加してくれました。彼らもこういった災害の後の世界にいることで、アートも何者かで有りうるという確信を少しずつ手に入れていったのかもしれません。アーティストはカナリアです。敏感で傷つきやすい。そのカナリアたちがおずおずと何かをはじめることによって、大きな災害の後で言葉を失っている人たちが巻き込まれ、生じていた分断や対立が柔らかく溶けていく。アートというわけのわからないものが仲立ちしなければ言葉を交わせなかった人たちが出会う。それがアートの力を信じ直す機会になっていったのだと思います」

森林文化を見つめ直すことの重要性

―それまで育んできた多くの人々との繋がり、そして県からの打診もあって2014年に『森のはこ舟アートプロジェクト』が誕生しました。森林文化をテーマに掲げた背景にはどのような思いがあったのでしょうか。

赤坂「福島には森がたくさんありますよね。とりわけ会津にいると森の中に町や村が浮かんでいるイメージを持ちます。その中で育まれた漆や伝統野菜、狩猟などの文化もまた森に内包されるもの。植物的、生物的なだけではない“森” をどうソフト化し、育成していくか、私はずっと考えてきました。今、里山は荒れています。それをもう一度再生させていくためにも森林文化をテーマにすることを決めました」

小林「漆の芸術祭では“ 自然と人との関係”を大きなテーマとしてきました。コンセプトとしてはやや硬かったような気もしていますが、森のはこ舟にはそれがスタート時から内包されていて、三島でEAT & ART TARO さんが行った『食のはこ舟』でのトチ餅作り、西会津で村山修二郎さんが行った『森をえがく ―植物を介したアート・コミュニケーションの実践―』での草木塔制作など、より具体的なかたちでプログラムに繋がっていきました。森のはこ舟アートプロジェクトは、会津にまだ残っているこれらの文化を、意識して考える場所にもなりうると思います」

赤坂「本当はなぜ森なのかと言うと、原発事故で森が汚されてしまったことへの怒りと悲しみなんですよ。ただ牧歌的に森の話をしたいのではなく、森で捕れた獣を食べられないというような現実をきちんと確認していきたいんです。人と自然の関係性を探れば探るほど、壊されていることにも出会いますが、それは隠すべきことじゃない。持っていたものを失ってしまったという視点もまた大切だと思います。そういった複雑な想いが2年間やってみてすごく出てきました。今の福島だから出てくる問題がある、それを伝えなくちゃいけないと感じています」

―3年目を迎える『森のはこ舟アートプロジェクト』が向かうべき方向とはどんなところとお考えですか?

赤坂「『福島の森が今どんな状態にあるのか』、そんな問いかけをしながらやっていくことでしょうか。里山の再生が叶わない限り、福島の再生もないと言えます。会津の森も汚れてはいますが、その度合はすごく少ない。他の地域では除染のためにどんどん木が切り倒されていますから。だからこそ会津の森を、里山を再生させていきたいと思う。再建のために何が必要か、これまでの動きをふまえ実践編に進むべきときと考えます」

小林「私は震災以降の福島にとってアートが役に立っていると信じています。森のはこ舟アートプロジェクトは、1年目で基盤を整え、2年目では力を溜めて事業が動かせるようになってきました。3 年目は数年先までのビジョンを見据えたプログラムの設計ができればいいなと思います」

赤坂 憲雄 Norio Akasaka

1953年、東京都生まれ。民俗学者、学習院大学教授、福島県立博物館長。『森のはこ舟アートプロジェクト』実行委員会委員長。東北学を提唱し、1999年に『東北学』を創刊。2011年以降は、東北でのフィールドワークに基づき、東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故により東北が直面にしている問題について講演や著作活動も行っている。

小林 めぐみ Megumi Kobayashi

1972年、福島県生まれ。早稲田大学大学院文学研究科修了。福島県立博物館主任学芸員。美術工芸を主とする福島県内の文化資源について調査。2010～2012年に開催された「会津・漆の芸術祭」の企画運営も手がけた。震災以降は『はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト』や『福島藝術計画×ASTT』に携わる。

『森のはこ舟アートプロジェクト』は、観光を目的とした芸術祭ではなく、アーティストと地域の人々が常にフラットに対話し続け、もぞもぞと何かが動き続けることを絶やさずに、丁寧にコミュニティを拓くことに徹したプロジェクトであった。

アーティストとともに行なった活動のひとつひとつも、そこにあるもの、ある時間、集まる人々が持ち寄れるものでのみ構成され、無いものは望まず、時に参加する人々すら選びながら進められた実に贅沢な文化の地産地消となった。

こうした3年間にわたる体験は、これからの福島の文化を育む上で大切な日々であったと実感している。新しいものを築くのではなく、自分たちが自分たちの価値に改めて気付く機会を得たことは、何ものにも代え難い。また、震災以降、私自身も含め、福島の人々にとって必要なそうした振る舞いを、地域を超えて協力し合いながら実現できたことを嬉しく思っている。

喜多方市、西会津町、三島町、猪苗代町、北塩原村、南相馬市に住む人々が連携できた理由は、何よりも森という文化資源を共有できたことにある。そして、森という文化資源がそこにあることを改めて気付かせてくれた福島県立博物館の存在の意味は極めて大きい。

『森のはこ舟アートプロジェクト』で育まれ、蓄えられた力が、今後はそれぞれ新たに芽吹いてゆくこと、それこそが“はこ舟”であろう。

最後に、福島の文化の未来に大きな期待を寄せ、また関わっていただいた大勢の方々に深く感謝を申し上げる。

森のはこ舟アートプロジェクト ディレクター
伊藤 達矢

『森のはこ舟アートプロジェクト』にご協力くださったみなさん（あいうえお順・敬称略）

喜多方エリア

会津の田舎を守り隊
揚津集落
浅野　希梨
浅野　健児
熱塩加納総合支所
有山　美佳
五十嵐　加奈子
五十嵐　健太
五十嵐　タカ子
五十嵐　力
五十嵐　力雄
石黒　麟
石島　来太
石田　菜月
井上　篤
猪俣　明裕
上野　寛史
臼井　奈美
漆窪集落
NPO法人まちづくり喜多方
江畑　芳
遠藤　浩一
遠藤　葉里寿
太田　洋成
荻野競艇場
小澤　弘道
小野　章
カイギュウランド高郷
金澤　文利
金親　丈史
金子　富之
画廊星醫院
喜多方観光協会
喜多方シティエフエム株式会社
喜多方市役所
喜多方市立関柴小学校
喜多方市立第一中学校
喜多方市美術館
喜多方・夢・アートプロジェクト運営委員会
キタ美実行委員会
橘内　ゆきえ
合資会社 大和川酒造店
小金沢　智
後藤　學
小土山集落
小林　愛
小林　昭二
阪下　昭二郎
佐川　友美
佐藤　國雄
佐藤　益代
清水　夏穂
障がい福祉サービス事業所ひだまり
食堂つきとおひさま
杉山　喜好
鈴木　駿
須藤　聖一
楚々木集落
そでやま夢交流館
高郷総合支所
高橋　芙実
髙橋　牧子
滝沢　達史
竹村　麗良
つきのわ実行委員会
戸田　和宏
冨田　裕幸
冨田　真紀
中鶴　洋
中山　晴奈
名取　和香子
成田　優之
馬場　由起子
橋谷田　弘由
HAPPINESS　BREAD
早川　直樹
蛭川　靖弘
福島県立喜多方高校
福島県立博物館
フリッペ
ふれあいランド高郷
幣島　正彦
法政大学稲垣ゼミ生
星　宏一
星　陽子
堀口　一彦
Bond　亜貴
Richard Alexander Bond
松原　東洋
水野　海里
宮澤　智
宮原　克人
室館　彩
目黒　栞
谷津　保奈美
ヤマダベン
山本　絃美
有限会社 すとう農産
横山　和美
レンカ
渡部　佳菜子
渡部　浩
渡辺　大樹

西会津エリア

阿部　彩花
荒海　正人
伊藤　和子
伊藤　善文
薄上　亮一
江田　睦美
NPO法人西会津国際芸術村
大森　茂樹
大山祇神社
小澤　伸行
小野　良昌
片岡　元次
片桐　功敦
株式会社西会津町振興公社
蒲生　庄平
木村　正晃
小瀧　達男
五寧　日南
五寧　陽平
小林　愛
小堀　晴野
齋藤　えりか
齋藤　和則
佐川　勝美
佐藤　昭悦
佐藤　光義
三瓶　たか
嶋村　俊光
William　Shum
鈴木　孝之
鈴木　菜奈
鈴木　満子
須藤　雅人
関口　日出雄
高久　孝仁
高島　正志
武樋　孝幸
田崎　敬修
田崎　友梨
樽井　清市
外島　拓
檜崎　萌々恵
にしあいづ観光交流協会
西会津小学校
西会津中学校
西会津町教育委員会
西会津町商工観光課
長谷川　久美
長谷川　麻也
長谷川　幸男
樋口　裕一
星　眞知子
間瀬　央也
群岡保育所
村山修二郎
森　幸彦
矢部　不二雄
矢部　悠子
横江　風香
横山　瑞華
横山　萌美
李　美喜
渡部　春佳
渡部　美緒

三島エリア

青木　武彦
安齋　聖人
飯田　将茂
五十嵐　健二
五十嵐　五郎
五十嵐　冨一
五十嵐　政人
五十嵐　理乃
池田　保
石川　彰
石川　夏樹
石川　文月
石田　結香
石山　望
礒部　直人
板橋　淳也
市川　由佳
一般社団法人IORI倶楽部
岩渕　良太
エコ・パワー株式会社（会津若松ウィンドファーム）
NPO会津みしま自然エネルギー研究会
大石　沙希
小栗　文夫
越智　亮太
勝部　里菜
加藤　萌絵
加茂　典恵
川合　正裕
カラーキネティクス・ジャパン株式会社
菅家　壽一
菅家　藤一
北館　亮
工藤　朝子
蔵本　航
小松　昭
小松　今日子
紺野　加奈恵
斎藤　明美
三枝　陽介
酒井　亜紀
酒井　菜津子
佐山　円未
篠倉　彩佳
白石　珠奈子
鈴木　絹彩
鈴木　健太
鈴木　実優
鈴木　ゆり
佐久間　宗一
佐藤　朋義
青年団
関口　綾子
SEPPEL　STINA
館　そらみ
田上　豊
田綿　遥妃
丹治　遥
千葉　清藍
角田　伊一
角田　正
角田　タニ江
永井　淳也
成田　敬
日産自動車株式会社
二宮　みどり
二瓶　厚
二瓶　一義
二瓶　譲
二瓶　常浩
沼田　拓也
野口　悠梨
Nounou　Bao
長谷川　賢之
長谷川　登志子
長谷川　洋子
長谷川　佳男
塙　純哉
早川　翔人
林　宏臣
平田　オリザ
廣木　真理
藤田　旭美
福島　有砂美
福田　耕士
福田　雪子
舟木　義晴
古川　弓子
別城　拓志
PENG　KE
堀　真実
堀内　菜穂
間方地区活性化事業
町長　しおり
松井　康幸
Mana　Salehi
三浦　直樹
三島町立三島小学校
三島町立三島中学校
三島町観光協会
三島町生活工芸館
三宅　映未
宮澤　響
村上　史明
森田　喜美代
森田　晋一
森田　勝
矢澤　源成
山口　一也
山本　耕嗣
吉村　勇紀
李　素和
Fokker　Richard
LY　HUYNH　NHU
Li　Lina

猪苗代エリア

安藤家のみなさん
猪苗代観光協会
猪苗代町教育委員会
NPO法人グリーンエネルギーユーザーズ
岡　武明
川越　良晶
鬼多見　賢
楠　恭信
齋藤　行仁
しおやぐらのみなさん
鈴木　清孝
鈴木　高
高久　博
千葉　真利
土屋　直史
つながるしぇのみなさん
長尾　景綱
中野　美奈子
新田　恭平
深谷　知広
三島木　尚也
森家のみなさん
山潟地区のみなさん

北塩原エリア

相原　哲也
五十嵐　正敏
稲田　由希
砂田　省三
中山　博人
布尾　和史
野田　文武
林　明輝
蓮岡　真
真野　真理子
湯田　慎吾

南相馬エリア

五十嵐　靖晃
稲葉　修
NPO法人浮舟の里
遠藤　雄幸
小高ワーカーズベース
二上　文彦
南相馬市博物館
森　誠一
和田　智行

事務局

秋葉　良栄
安齋　明美
江頭　宏昌
NPO法人はるなか
貝沼　航
佐々木　長生
佐藤　聖太
佐藤　達夫
JT生命誌研究館
須田　健志
田附　勝
中村　桂子
村松　道代
和合　亮一
渡部　智史

※今年度参加アーティスト・実行委員会メンバーを除く。

主催：福島県｜森のはこ舟アートプロジェクト実行委員会
実行委員会事務局：特定非営利活動法人ふくしまアートネットワーク
共催：東京都｜アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）
協賛：日本たばこ産業株式会社
助成：文化庁
協力：心の復興推進コンソーシアム

文化庁

Future From Fukushima.
ふくしまから
はじめよう。

平成28年度 文化庁
文化芸術による地域活性化・国際発信推進事業

このプロジェクトは、森林環境税を活用しています。森林をみんなで守り育てよう。